

遊佐町埋蔵文化財調査報告書 第7集

K-370

小山崎遺跡

— KOYAMAZAKI SITE —

第14次発掘調査報告書

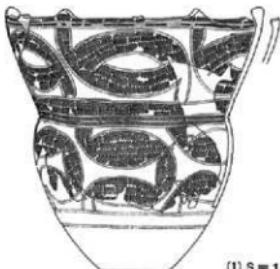
2008.3

山形県遊佐町教育委員会

こ や ま ざ き

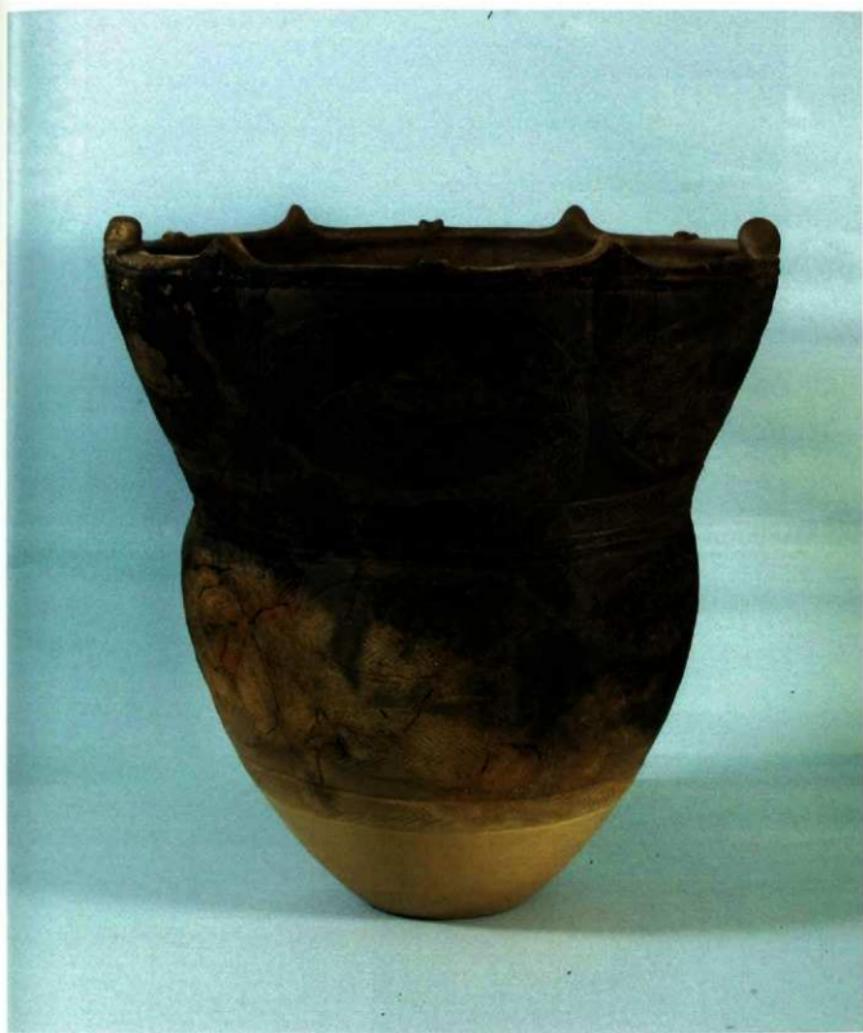
小山崎遺跡

第14次発掘調査報告書



(1) S = 1/8

平成20年3月
山形県遊佐町教育委員会



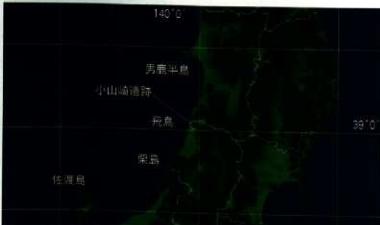
1 深鉢形土器(1)



2 航空写真(A:小山崎道路・柴垣林道跡 B:歐浦道路 C:小倉向道路)



3 滝防遺構(西から)



4 道路位置図



5 第Ⅱ調査区全貌: ST1・ST2 掘出状況(南から)



6 排式炉[ST2 内設置]検出状況(南東から)



7 第Ⅱ調査区北壁層序(南から)



8 第Ⅱ調査区4番検出土器(RP68)



9 第Ⅰ調査区出土土器(RP101)



10 第Ⅰ調査区西部堆積物状況(北西から)



11 第Ⅰトレンチ全景(北から)



12 第Ⅱトレンチト-1区層序(北東から)



13 第Ⅱトレンチト区北壁層序(1')



14 斜面地形を削平した生活面と柱穴検出土状況(第Ⅳトレンチ e-1区西壁)

序

本書は遊佐町教育委員会が発掘調査を実施した、小山崎遺跡の第14次発掘調査成果を報告するものです。

小山崎遺跡は山形県の北西部、遊佐町吹浦に所在します。日本海から聳え立つ独立峰、鳥海山の豊かな森と湧水を抱く山麓には、古くは後期旧石器時代前半期より人類の足跡が確認されています。特に山麓部の縄文時代と平野部の古代遺跡の密度と内容は際立ちます。これは、自然の豊かさは無論、越後と出羽、広くは環日本海路の要衝としての立地や、律令国家による出羽国政が反映されたことに起因します。

遺跡は平成7年の第1次調査で、通常では残らない縄文時代の後期を主体とする動植物遺存体を伴う地層が、現水田面下2.5mにまで堆積していることが判明しました。縄文時代の早期末～晚期前葉に至る約3,800年の時間幅を持つ低湿地遺跡はきわめて稀で、東北日本海側では今のところ確認されていません。昨年の第13次調査では低湿地部へ多量の遺物を残した人々の居住地探索が急転し、至近の山麓傾斜面に存在することを突き止めました。成果を受け、平成19年度は、居住を示す遺構の詳細や、斜面地の造成による生活空間の構築等が、はたして縄文人の手によって行われているのかを追求する目的を持ちました。結果、幾重にも積もった地層中に、縄文時代中期と後期という時期を異にする住居跡等の構築物が切りあって姿を見せました。特に庄内平野に向か南面する複式炉や後期の埋設状態で出土した深鉢形土器は長年探索している縄文時代の生活空間の只中に入り込んだことを如実に感じさせてくれます。

成果は集落の構造を知る上で確実な前進をしました。確認できた遺構は詳細に記録され、今後の活用を待つ為に現地で保存の措置がとられています。また、遺跡の存在に欠かせない厚みのある地層の様相についても発見がありました。居住域の模式となる地層が想像以上に深い堆積を示す地点が存在していたのです。遺跡が良い状態で保存されていることに期待が持てますが、その深さから、今後の調査方法に課題も投げかけています。いずれにしても、多くの情報を得ることができた調査となりました。

遺跡の傍らを流れる清流牛渡川に今も変わらず潮上する鮭は、類まれな縄文遺跡の環境がいかに優れたものかを教えてくれます。環境を破壊することなく、自然と遺跡の調和を模索し活用することが我々に課せられています。古環境や食生活などの情報を豊富に提供してくれる遺跡の真価を引き出し、成果を地域に還元する努力が必要となります。

最後に、発掘調査・整理作業及び本書作成業務に御協力を賜った関係各位に心から感謝申し上げると共に、本書が埋蔵文化財の保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動等の一助となれば幸いです。

平成20年3月

遊佐町教育委員会
教育長 小田島健男

例 言

- 1 本書は遊佐町教育委員会が実施した小山崎(こやまざき)遺跡の第14次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、町教育委員会が主体となり、国庫補助を受けて実施する継続事業の3年次となる。
- 3 発掘調査は、目的別に、丸池北方の緩やかな谷間の緩斜面における試掘坑49ヶ所（内1地点で深掘拡張区設定）、山麓傾斜面のトレング4本（第1～4）119m²と第Ⅰ・Ⅱ確認調査区（計98m²）に大別され、調査面積の総計は267m²で実施した。
- 4 調査現地は鳥海国定公園第三種特別地域に属する為、調査に先立ち、自然公園法第13条第3項の規定により県知事より許可を得て実施している。
- 5 現地調査は平成19（2007）年6月28日に開始し、11月6日には終了している。実働は63.5日間であった。期間中、8月30・31日には渡辺丈彦氏（文化庁記念物課）の現地指導を受けた。9月8日（土）には現地説明会を実施し、調査の成果を公開している。
- 6 整理作業、報告書執筆は平成19年12月10日～平成20年3月に実施した。
- 7 発掘調査の体制は、主体の遊佐町教育委員会が小山崎遺跡調査委員会を組織して、実際の発掘・整理・報告書作成までの実務にあつた。体制は下記の通りである。

調査総括 小田島健男（遊佐町教育委員会教育長）

主任調査員 佐藤禎宏（日本考古学協会員）

調査員 大川貴弘（遊佐町教育委員会生涯学習係主事 日本考古学協会員）

調査指導 文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門・山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室・財団法人山形県埋蔵文化財センター

現地指導 渡辺丈彦（文化庁記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官）

調査委員 渡谷孝雄（山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室 室長補佐）

阿部明彦（山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室 埋蔵文化財専門員）

事務局長 高橋勲一（遊佐町教育委員会教育次長）

事務局員 青葉信子（遊佐町教育委員会教育次長補佐）

渡会和裕（生涯学習係主任）

友野 毅（生涯学習係主任）

齋藤智恵子（生涯学習係主任）

発掘調査作業員

太田桃子 小野寺博喜 小松美登子 佐藤菊子 佐藤静雄 普原二郎 高橋慶一

高橋 鑑 富樫榮吉 土門加代子（町臨時職員） 鳴瀬敏勝 本間一吉（五十音順）

- 8 本報告書の作成と編集は、佐藤禎宏と大川貴弘が協議し、執筆はIVの佐藤以外は大川貴弘が担当した。全体については佐藤禎宏が監修した。

- 9 整理作業全般で、小松美登子・太田桃子・土門加代子が佐藤と大川を補佐している。掲載写真は巻頭図版1の空撮写真を除き大川が撮影した。

- 10 現地調査から報告書作成にあたり、文化庁文化財部、山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室からご指導とご協力を賜った。渡辺丈彦（文化庁文化財部記念物課文化財調査官）からは、現地にてご指導を頂き、調査期間の延長等、調査の方向性についてご意見を賜った。

佐藤庄一氏（県文化財保護室長）をはじめ、調査委員の渋谷孝雄、阿部明彦両氏には現地指導の他、遺跡調査全般で適切な指導を頂戴している。

- 11 現地の地質学的な様相と出土石器の石材同定については、柴橋敬一氏（日本火山学会員）よりご教示を賜っている。

- 12 調査の記録と遺物は、遊佐町教育委員会が一括して保管している。

- 13 委託業務は次の通りである。

調査地の基準杭の設定及び周辺地形図作成：有限会社アース測量

放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所

出土土器修復ならびに実測図作成業務：株式会社シン技術コンサル

凡 例

- 1 検出遺構と遺物の登録は、下記の分類記号を用いて番号をそれに付してある。

ST…堅穴住居 SK…土坑 SD…溝・周溝 SX…性格不明遺構 SP…柱穴・ビット
EL…複式炉・地床炉 EU…埋設土器遺構 RP…土器・土製品 RQ…石器・石製品

- 2 調査区は正方形のグリッドに基づいて区割りしている。グリッドのY軸は真北を示す。調査区平面図には国土座標の数値を記載している。

3 丸池北方試掘坑設定地区は、50cmセンターで作図した詳細地形図を用いている。

- 4 調査記録時は、遺物個々の出土位置を要所にベンチマーク（B-M）を設置し、絶対標高で記録した。平面記録では2メートル四方の小区に細分するグリッド法を併用した。レベル計測では㈱山形測器社製デジタルレベル SDL30を使用した。

- 5 採録した地形図・調査の平面図・層断面図の縮尺はスケールとともに付記している。トレング断面図は1/100、構造実測図は1/20・1/40・1/80で採録した。土器の実測図は1/4、拓影・土製品は1/3を原則としている。石器の実測図は打製石器・磨製石器・石製品が1/2、礫石器など大型の遺物は1/3の縮尺で掲載している。写真的縮尺は不統一である。

- 6 調査区平面図で遺構は□で示した。同スクリーンは遺物実測図中に重ねて付着する使用痕による光沢を示す箇所を示す場合にも使用している。

- 7 掲載した石器と土器には通し番号を用い、実測図と拓影図と写真の同一個体は同一番号とした。挿図と写真図版は、対応関係を示している。

- 8 層序はすべて算用数字で表記している。

- 9 石器属性表の石材同定は、磨製石器・石製品は柴橋敬一氏の肉眼的観察により、打製石器ならびに半透明頁岩と記載した資料については、大川の判別による。

- 10 土層断面図で用いた色調の記載は「新版標準土色帖（2006年版）」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による。

- 11 本文では関連機関について次のような略称を使用した。

文化庁文化財部：文化庁、山形県教育委員会：県教委、遊佐町教育委員会：町教委

山形県埋蔵文化財センター：県埋文、山形県立博物館：県博

発掘調査から本書の作成の過程で、下記の諸機関・諸氏によりご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。（敬称略 五十音順）

鳥海山大物忌神社 土地所有者各位 箕輪鰐魚業生産組合 山形県庄内総合支庁

菅野智則 後藤美穂 須藤英之 中里洋子 新屋内高史 羽島政彦 松井 章 宮尾 亨

目 次

巻頭図版

序 文

例言・凡例

第Ⅰ章 遺跡の環境と調査

1 遺跡の立地	1
2 調査の経過	2

第Ⅱ章 本次の調査

1 調査の目標	4
2 調査の内容	4

第Ⅲ章 調査の結果

1 分布調査	7
2 トレンチ調査	8
3 第Ⅰ調査区の調査	11
4 第Ⅱ調査区の調査	12
第Ⅳ章 成果と課題	14
<引用・参考文献>	15

付編 放射性炭素年代測定結果報告書
報告書抄録

卷末

巻頭図版目次

巻頭図版 1	第 1 トレンチ出土の深鉢形土器
巻頭図版 2	航空写真・位置図
巻頭図版 3	第Ⅱ調査区の遺構検出状況
巻頭図版 4	第Ⅰ調査区の遺構検出状況と 第Ⅱ調査区の基本層序
巻頭図版 5	トレンチ調査区の遺構検出状況 と基本層序

表目次

表 1	第 1 ~ 4 トレンチと第Ⅰ・Ⅱ 調査区の 出土遺物集計	9
表 2	掲載石器属性表	15
表 3	小山崎遺跡周辺（丸池北部山間） の分布調査状況	17
表 4	試掘坑出土の遺構一覧	17

挿図目次

図 1	小山崎遺跡周辺の地形と縄文遺跡群	1
図 2	調査区の配置図 1	2
図 3	調査区の配置図 2	5
図 4	第 8 ~ 14 次調査の試掘坑の位置と地形	6
図 5	丸池北方試掘坑の配置図	18
図 6	丸池北方試掘坑の検出状況	19
図 7	第 1・2 トレンチの層序と検出状況	21
図 8	第 3・4 トレンチの層序と検出状況	23
図 9	第Ⅰ調査区の遺構・遺物出土状況	25
図 10	第Ⅱ調査区の遺構・遺物出土状況	26
図 11	丸池北方試掘坑の出土土器	27
図 12	第 1 トレンチと第Ⅰ調査区の主要土器	28
図 13	第 1 トレンチと第Ⅱ調査区の出土土器と土製品	29
図 14	第 2 トレンチと mn-E 拡張区の出土土器と土製品	30
図 15	第 3 トレンチと第Ⅰ調査区の出土土器と土製品	31
図 16	第 4 トレンチの出土土器と土製品	32
図 17	実測図 打製石器	33
図 18	実測図 磨製石器と礫石器	34
図 19	実測図 磚石器	35

写真図版目次

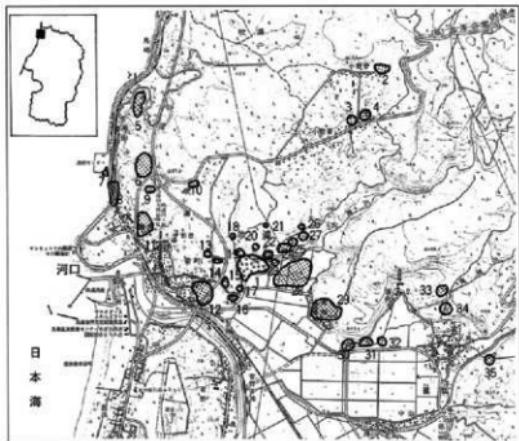
写真図版 1	丸池北方試掘坑の調査状況
写真図版 2	第 1・2 トレンチの調査状況
写真図版 3	第 3・4 トレンチの調査状況
写真図版 4	第Ⅰ調査区の調査状況
写真図版 5	第Ⅱ調査区の調査状況
写真図版 6	丸池北方試掘坑の出土土器
写真図版 7	第 1・2 トレンチと第Ⅱ調査区の出土土器
写真図版 8	第 3・4 トレンチと第Ⅰ調査区の出土土器
写真図版 9	第Ⅰ調査区出土の主要土器
写真図版 10	第 1・4 トレンチと第Ⅱ調査区出土の主要土器
写真図版 11	打製石器
写真図版 12	礫石器と磨製石器

第Ⅰ章 遺跡の環境と調査

1 遺跡の立地

国内有数の大型成層火山である鳥海山（2,236m）を仰ぐ遊佐町は総面積208.41km²を測り、標高150m前後に広がる火山性の扇状地形上や、西方日本海に流下する中小河川沿いの平野部自然堤防上には、207ヶ所（平成17年11月現在）の遺跡が確認され、庄内地方での遺跡の集中地帯となっている。中でも縄文時代の遺跡は111ヶ所を数え、54%を占める。次いで30%を占めるのが律令期の出羽国古代集落である。両時代をあわせると実に登録遺跡の8割以上となる。一方、現状では弥生～飛鳥藤原時代にかけての遺跡の発見が極端に少ない傾向を示す。当町の人類の足跡は後期旧石器時代前半（AT火山灰下位）に遡るが、縄文・平安両時代の繁栄は、県下でも特異な傾向を見せる。環日本海路に位置づけられる立地と、古代～中世の出羽国政と密接に関連した土地ゆえの特色である。付近一帯は庄内平野北端に位置し、南北の文化交流が交差する場所である。小山崎遺跡は、吹浦川の河口から東へ直線距離で1.5km、鳥海山の裾野が平野部と接し、崖線からの湧水源が随所に点在する場所に位置し、南方遙かに月山を望む。行政地番は遊佐町吹浦字七曲、七曲堰ノ東、柴燈林他である。箕輪鉢人工孵化場の西に、標高6m前後の低平な舌状台地が南東方向に向け180m程度ある。台地（俗称小山崎）の周囲に低湿地部が形成され、早期から晩期に至る層厚2.5m以上の動植物遺存体を含む包含層が、年間平均水温10℃の冷涼かつ安定した地下水位に守られている。

付近には、考古学史上著名な縄文遺跡が散在する。9世紀の正史『日本三代実録』に記録された朝廷も兵事の兆しとした「飽海都神宮寺西浜」での石鎚降雨事件は先史遺物の記述の最古であるが、現在は最高標高60mを測る庄内砂丘下に埋没し確認はできない。西方0.7kmの吹浦遺跡は長谷部言人博士の試掘（1919）に始まり、県内学術調査の黎明期を担い、円筒土器系・大木式系土器群の接触の問題を提起し、柏倉亮吉らが提唱した前期末の『吹浦式土器』の標識遺跡である。北方4.8kmには、中国殷周期の青銅刀子が出土した後期の三崎山A遺跡がある。南東4.8kmには、庄内地方縄文後期土器型式編年研究に寄与した神矢田遺跡（佐藤楨宏他、1972）が存在する。また、昭和27（1952）年に杉沢A遺跡から出土した晩期後業の遮光器土偶（奈良国立博物館蔵）は亀ヶ岡文化の優品である。とりわけ小山崎遺跡周辺は、月光川水系の河口部で形成される縄文集落群と認識される。



周辺の縄文遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	小山崎	19	七曲道上
2	小野曾C	20	柴燈林2
3	小野曾A	21	柴燈林3
4	小野曾B	22	丸池
5	湯元田山	23	荒川
6	小屋林道西	24	柴燈林
7	並鐵	25	牛渡1
8	南光防坂	26	柴燈林4
9	小屋林道東	27	牛渡2
10	ムジナ堂	28	舟森
11	小長板	29	笑輪
12	吹浦	30	下山
13	大黒板	31	並洞
14	物見峠B	32	目倉神
15	物見峠A	33	小倉向
16	小谷地	34	山居
17	物見峠C	35	川東
18	柴燈林5		

図1 小山崎遺跡周辺の地形と遺跡 (1/50,000)

2 調査の経過

遺物の採集により明治から周知された小山崎遺跡が貴重な低湿地遺跡として行政発掘されるのは、平成7年度の第1次調査（渋谷1995）が発端である。縄文時代早期から晩期の遺物が層位的に出土し、水場遺構等の構築物も確認された。特に高い地下水位の安定した環境下で保全された泥炭質の包含層に多量の動植物遺存体が存在する事実は遺跡の位置付けを劇的に変化させた。縄文時代の長期にわたる環境・植生等の生業に関わる事象を分析可能な遺跡としての重要性に異論はなく、遺跡の主要な低湿地部分（11,307m²）は遺跡の保存・活用事業用地として保存されることになった（2004年：公有地化）。調査は2002年の第7次調査まで、県教委による継続調査が実施されている。主に低湿地部において調査区が展開しているが、舌状台地上でも若干の調査が実施されている（図2）。膨大な有機遺物を含む生活残滓を低湿地部に残した縄文人の日常生活に関わる遺構を探索する目的の調査であったが、居住城として認定できる状況を掴むには至らなかった。しかし地表面T2.5m前後、海拔0m以下に至る動植物遺存体を含む遺物包含層の分析による海進・海退等の自然環境の変遷の様相や植生等自然環境の当該地方の状況の理解に、新潟県以北の日本海側では極めて重要なデータを提供している。また、第2次調査A区の建物遺構、4次II区で全貌が判明した湿地北西部の柱根と配石遺構の水場遺構や、6次T区で検出された焼土層を伴う小貝塚など集落構成上の重要な遺構が検出されている。質の高い有機遺物は目を見張る物があり、各調査次には、舟の櫂、丸木弓・漆器、骨角器等、儀礼的な用法が考えられるイノシシ形漆塗木製品等の優品が伴い、動物遺存体にとどまらず、第6次調査では人骨（頭骨・下頬骨）の検出もあった。

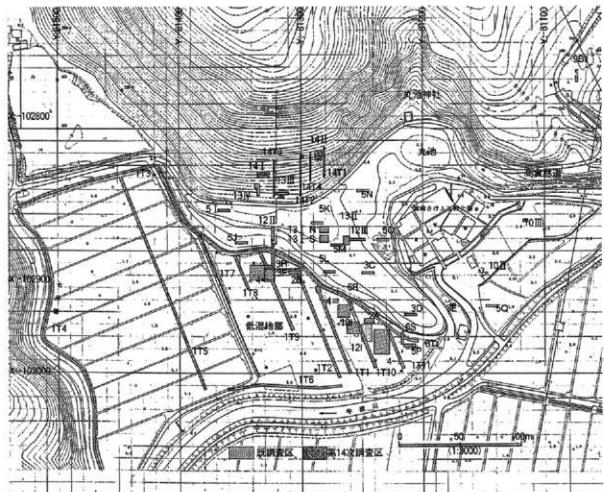


図1 小山崎遺跡周辺の地形と遺跡 (1/50,000)

継続する重要遺跡としての調査は、低地部の主体を示す縄文後期集落構成の解明という目標を持つことになる。県教委の調査成果を受けて03年から町教委では第8・9次調査、翌04年に第10・11次調査を緊急雇用対策事業として実施した。計4次の調査では、遺跡北方に広がる台地上平坦部を中心に分布調査（一部確認調査）を行い、縄文中期～平安期の新規7遺跡を確認・登録した。とりわけ標高18～30mの柴林木遺跡（B地区）は、規模の大きな中期中葉の集落であることが確認され、大字8 a式期の土器に伴出する形で、本撫地新潟より搬入された火焔型土器も検出されおり、2007年度に多方面の協力により完全復元されている。一連の調査では地形的範囲・遺跡群として考察する成果が上がっている。

平成17年の第12次調査からは国庫補助事業と位置づけられ、引き続き後期の居住地點の確定に向けた5年計画の取組みが開始された。調査地選定においても変化点となり、北方台地面に展開する試掘調査地點を湿地部内に延びる舌状台地付近に視点回帰した調査を実施した。この調査では安山岩の巨岩が露出する舌状丘陵の包含層の堆積状況は良好とは言えない状況ではあったが、確かな生活が低湿地北方台地上で営まれていたことを示唆する成果が上がっている（佐藤・大川2005）。すなわち低湿地部に南面して落込む急斜面直下の湿地部（II h区）より、縄文後期前葉の有機物を含む泥炭質の遺物包含層が確認され、骨角器2点を含む極めて状態のよい多様な動植物遺存体が検出された。縄文後期前葉の泥炭質の遺物包含層であり、同定結果から、生物骨としてカヌスマ類、サケ・マス類、マダイ・ヘビ類、アビ類、アホウドリ類等が認められている。タイ類は貝殻類似の大型個体が含まれ、魚類は焼骨が多く見られた。縄文人の食料資源としての利用を直接的に考察できる。ツキノワグマの臼歯と末節骨の廃棄場の性格の地點からの出土状況等は興味深い事実であった。鉛先形の骨角器はかつて検出されている釣り針と共に、多様な狩猟道具の存在を示した。12次調査での生活残滓の投棄場の地點の確認は、湿地部から見上げる台地上から投棄されたことを如実に物語り、広く生活の主舞台が展開していた可能性を強く示唆していた。出土した宮戸1b式や堀ノ内1式併行期の土器群は、概期の研究資料の少ない当該地方の基準資料となる一群となつた。

翌2006年の13次調査では、小山崎遺跡の集落根拠地を推定する上で興味深い事実が浮かび上がっている。湿地に伸びる舌状台地の試掘により出土した資料は後期～晩期の資料が圧倒的に多く、目的とする後期の只中としての土地利用の状況は希薄であった。土取による影響も考察できるが、出土遺物の偏りが後世の人为的影響を被ることはあり得ない。やはり後期全体として舌状丘陵の利用は希薄とみなすのが妥当といえよう。必然的に先述した12次調査検出の台地直下の投棄場を利用した後期前葉の人々の根拠地が問題提起された。遺跡内には高倉林道が東西に横切っており、道を境に北側は広い山麓傾斜面となる。過去の分布調査ではこの傾斜面を視野に入れず、より高位置に2面存在する平坦面を調査して後期根拠地を追及できずにいた。林道に沿う形で若干の試掘坑を設定した結果、林道南方とは別次元の良好な堆積環境であることが判明し、遺物も後期の資料が多かったことから、調査後半はこの林道北部緩斜面地帯での詳細かつ広範囲の試掘調査に加え、2ヶ所の確認調査が実施された。結果、想像以上の密度で、後期を主体とする遺構が展開していることが判明した。また、遺跡の下限を早期後葉まで遡らせる鳥島式併行と目される示す資料の検出もあった（佐藤・大川2006）。

13次調査は集落根拠地探索の大きな転換点になったが、遺構保存を優先して、大部分プラン確認に留める調査であった為、堆積層序等、解明必要な課題の解決は翌年の14次調査にて実施されることになった。

第Ⅱ章 本次の調査

1 調査の目標

昨年の第13次調査の結果から、低湿地保存地区北方約50mから始まる山麓傾斜面に後期縄文人の日常生活空間が広範囲（東西幅約100m）に存在することが判明した。昨年度は遺構保全の観点から、遺構検出面でのプラン確認等に留意しており、堆積層の厚みの全容や時期別の遺構の切りあい、重複関係等に課題を残している。

今次の調査では、この傾斜面地を主舞台とし、集落の構造解明に向け、遺構の保全を大前提としつつ、面的な広がりを持つ調査区を設定した。住居跡等の遺構を見出すことと、斜面地の特性上、集落設営に伴う切土等の地ならし作業の実跡が検出できる可能性を想定した。調査手順として、斜面地の複数ヶ所に傾斜に直行する長さ30m、幅1m程度のトレーナーを先行調査し、層序の観察、遺構・生活面の分布を把握した上で面的広がりを持つ確認調査区の地点を選定することとした。また、小山崎遺跡で実施している一連の分布調査の手の及んでいない丸池北方の緩やかで深い谷間の試掘調査も実施した。これは斜面立地集落の存在の観点により、柴燈林・丸池両遺跡の範囲拡大の可能性が視野に入ってきたことによる。

2 調査の内容

今次の調査は、地点・所属時期・調査形態の各面で大きく2つに分割される。一つは後期集落跡の所在する斜面地での調査。一方は、丸池北方の谷あいの試掘である。試掘に先行して地形図の作成（50cmセンター）を行い、調査用の測量基準点を設置している。すべて民有林内であり、鳥海国公園第3種特別区城に位置する。自然公園法の内に入る。

実際の調査では先に丸池北方の試掘を実施した。倒木や簡便材が地表を覆う条件下での試掘であったが、多大な成果が上がっている。谷東部の西向き傾斜面を中心に、中期中業の遺構の検出が相次ぎ、奥行きも約110mと想定以上に濃密に遺跡が存在することが判明した。堅穴住居跡と認定可能な遺構も3地点で確認され、試掘坑数は49地点に上った。出土遺物が中期中業を主体とする遺跡であり、既知の東斜面上に展開する柴燈林遺跡、あるいは斜面下の丸池遺跡の範囲拡大として認識可能であった。

一方の昨年の試掘調査により判明した後期居住域における調査は、今次調査の中核をなす地点である。4ヶ所のトレーナー調査区（第1・2・3・4）が先行調査され、後にこの成果を受け第I・II区の面的広がりを持つ確認調査区を精査している。この一帯での調査面積は217m²を測る。すべて杉の生茂る民有林内での調査となつたが、住居跡等の数多くの遺構を検出する成果が上がり、調査期間中の文化庁担当調査官の現地指導時の助言ならびに調査委員との協議の上、調査期間が約1ヶ月延長されている。各先行トレーナーでは、生活面と目される水平に削り出された地点が確認され、一部斜面下で表層の如き地點が認められたが、全体として、予想以上の層厚（1m以上）を持つ地点が多く、居住域の標準層位を掴むことができた。昨年度の試掘で地山と認定した層位が、斜面を覆う流下した土砂であり、下層の良好な遺物包含層の存在が判明した点は認識を改めさせられた。第I・II調査区では、各区重要な遺構を確認されている。第I区では、後期前業～中業の遺物に伴って、検出された地床炉や柱穴と目される遺構が住居跡と認定可能かどうかが課題の遺構が検出された。第II区は最大の成果があり、中期後業の複式炉を持つ住居跡一棟と後期縄文人の堅穴住居跡が切りあう状況が検出された。後期埋設土器等、出土遺物はコンテナ30箱が文化財認定されている。

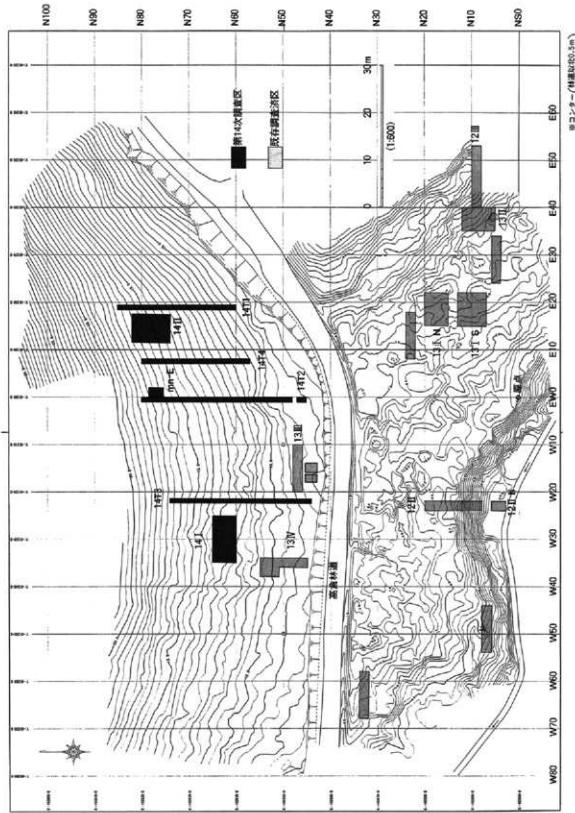
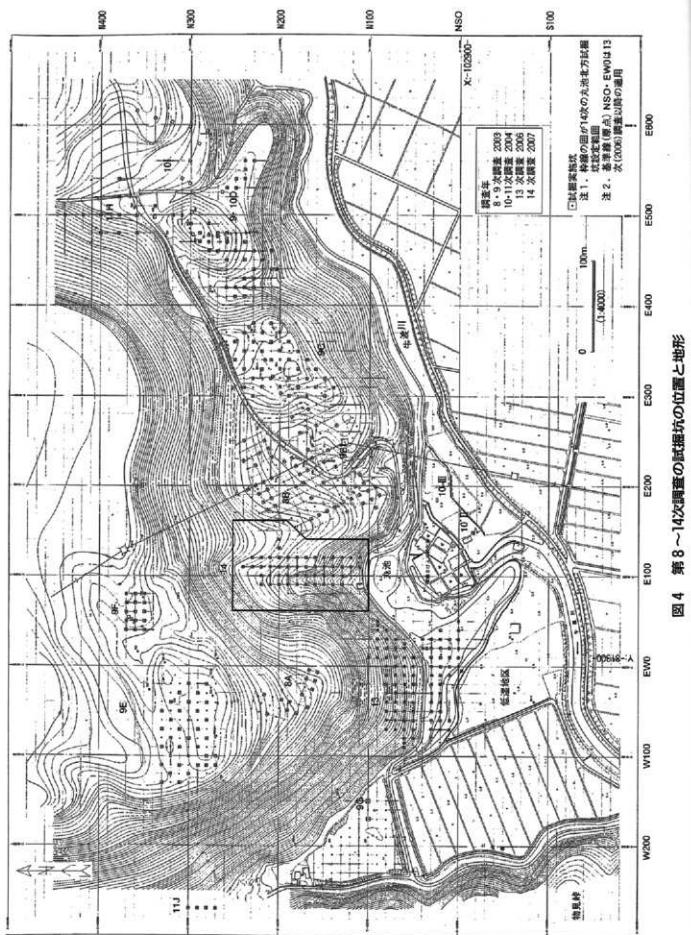


図3 調査区の配置図



第Ⅲ章 調査の結果

1 分布調査

(1) 試掘坑の配列 (図4・5)

丘陵西のX: -102900、Y: -81300を原点として、東西をX軸、南北をY軸とした座標軸に従い10mメッシュを設定し試掘坑を設けた。丸池神社付近のN110ラインを基点に最大N240ラインまで南北幅130m、東西幅50m（最大幅）の範囲で実施した。調査坑は49ヶ所である。一部、深掘実施により拡張区を設けている（E110N110）。下部の丸池神社付近と上位試掘坑の標高差は24.6mを測る。高位位置の試掘坑からは丸池の泉を見下ろす地勢を成す。

(2) 調査経過

試掘坑49ヶ所の配列は当初E90～110の3列で、10m間隔で北に調査を進めた。風倒木、間伐材の処理を兼ねて通路を設置しながらの作業であった。E100列以東の東斜面に遺構・遺物の出土が多く確認されたことからE120列を新設したところ、遺物の検出はE110列同様に濃厚なものであり、遺跡範囲の東限を探る必要性が生じたが、遺跡の主体が中期中葉であり、今次調査の主目的である後期集落域の追求に合致しない事が判明した。上記の理由により、後の調査期間に影響が及ぼすことが懸念されたことから、上部のN200列の試掘坑を東方に20m延長し、遺構・遺物の出土を確認し、E140列までは確実に遺跡が展開していることを確認するに留めた。試掘結果としては、77.5%という高率で遺物の確認を見、遺構検出割合も22%という数値を残している。遺物出土の北の限界は押さえることができ、N220（H:24.8m）ラインを境に以北で遺物の出土は見ていません。

(3) 堆積層の様相 (図6)

谷状の地形の様相を反映して、谷底を中心に、両サイドの緩斜面での層位が良好であったことが特徴的である。とりわけE110以東の西向きの東斜面での土層堆積環境は良好で、遺構・遺物の検出も、際立っている。特に試掘坑No E120N150は約1.3mの分厚い7層にも及ぶ層序は注目できる。E110N170他の竪穴遺構検出坑においても、明瞭な層序を保っており、斜面地、試掘坑という限定された調査面積にも関わらず、水平な床面と壁面の明瞭な上立ちり、遺構覆土を確認することができた。対照的に、E100列以西においては、層位の環境が明瞭でない地点が多く見られ、遺構の検出もできなかった。ただしE90列においては、地層堆積環境は悪くない地点にも関わらず、遺物の出土量は概して少ない傾向にあり、谷を囲む東斜面と西斜面での中期中葉繩文人の土地利用形態の差異を感じられた。丸池神社付近の古い丸池の痕跡と目される地点で深掘を実施している（E110N110）。湧水が激しいながらも、中期以降、晚期等の遺物が確認された。明確な漆黒泥炭層には至らなかったが、丸池の古環境分析にも興味が持たれ、下層の泥炭質の土層はすべて採取保存している。

(4) 出土遺構 (表4、図6)

検出された遺構は竪穴遺構3ヶ所、土坑4ヶ所、柱穴2ヶ所、性格不明遺構2ヶ所を数える。特にST-1～3は平坦な床面と壁面の立上がりが顕著で、特に平坦な床面の形成が、土坑との違いとして住居跡認定の根拠としている。E110N190(ST1)は最初に確認された竪穴遺構であるが、3層中から30cm以上の深さでの掘込みと覆土が明瞭に観察され、以後に見つかったST2・3も同様の構造であり、両試掘坑では人頭大の安山岩繩の住居跡への落込みも確認できた。試掘坑内最大の層厚を持つE110N170については、その夥しい出土土器量から当初、捨場を想定したが、竪穴住居跡内の可能性も考慮したい。

(5) 出土遺物 (表3、図11)

(1) 土器 (図11)

試掘坑全域から出土した土器及び土製品の総量は1,564点である。図11の拓影図はおむね該当時期と型式の推移を並べている。4は縦線と押縦繩文が組み合わさる大木7b式で、他は概ね大木8a式の特徴を示す。9、11は口縁部の隆線による横位S字繩文や立体的な橋状突起、縦線による文様が発達する。5~7は先行する大木7b式期に特徴的な交差割突による連続コの字繩文が付されるが渦巻文や3本1单位の描線と組み合わさることで大木8a式とした。僅かではあるが31の晚期中葉の大洞C1式土器が出土している。32は底部に回転糸切痕が観察される平安期の赤焼き土器の杯である。全体としての土器様式は、近接する柴燈林遺跡B地点の調査結果と酷似する。純文時代中期中葉以降の特徴を明確に示す資料は確認できなかった。

特筆すべき資料として、資料28(試掘坑NoE120N200)が上げられる。新潟火塗土器様式の袋状突起を貼付した胴部の破片であるが、火焰型・冠型どちらに付されたものかは単体での出土の為不明である。しかし、約100m東方の柴燈林道路B地点では、第8次調査にて火焰型土器が出土している為、当該時期に、新潟方面の土器が複数個体この地に搬入されていることが証明できた。

(2) 石器と石製品 (表2、図17~19)

試掘坑から検出された石器は土器に比して少數であった。剥片まで含めても51点である。図化した代表的な石製品はE110N160出土の中葉期の扁平で長細の礫石錐(37)が上げられる。他には14の削器、36の尖端式の磨製石斧欠損品、20の台座風の凹石等、一連の生産関連石器が出土しているが、儀礼的性格の石製品は未検出であった。

2 レンチ調査

(1) 第1~4レンチの配置 (図2・3)

レンチ調査は昨年の試掘で後期居住域が展開する高倉林道北側の山麓傾斜面に直行する形で4本設定している。レンチの規模は①第1レンチ(1×25m: 比高差7.5m・平均斜度18.8°)②第2レンチ(1×35m+拡張区2×3m: 比高差9.6m・平均斜度18°)③第3レンチ(1×30m: 比高差7.0m・平均斜度16.5°)④第4レンチ(1×23m: 比高差6.7m・平均斜度16.4°)を測る。第1と第3レンチは、後に設定される第I・II調査区の設定根拠となる先行レンチと位置づけられるが、第2・4レンチについては位置づけが異なる。第2レンチは当初、東西両サイドの第1・3レンチの間を埋める目的で設定されたが、高倉林道に近い下方部での表層の残存率の悪さとトレンチ中腹近くから確認できた山崩れ等による造構包含層をバックする無遺物層(層面)に惑わされ、トレンチ中央部以北の調査を放棄していた。しかし、トレンチ中央部付近より上位には、厚い無遺物層下位に、生活面を含む良好な堆積層が存在していることが明らかになった為、調査を継続、加えて小規模ではあるが拡張区を設定しての調査を行った経緯がある。第4レンチは、当初計画にはなかったが、第II調査区での住居跡等の発見により、周辺区域の造構・生活面剖面の分布を探る必要性から、渡辺丈彦(文化庁担当官)の現地指導時の助言により、調査期間延長決定後に新設されている。いずれのトレンチも南面する。斜面を覆う杉木立がなければ、庄内平野や、遠く月山を望むことが可能で、至近の低湿地区はむろん、第1レンチからは遺跡内の重要な水源として利用されたであろう丸池を見下ろすことができる。

各トレンチは、2.5mごとに小区を設定し、5m毎に土層観察用のベルトを設けている。各区の記載はa・b等アルファベット小文字標記で記載し造構・遺物の計測にあたった。

表1 第1~4レンチと第I・II調査区の出土遺物集計

調査区	記載別	土器			小計		打撲石器			網片		礫石器		板岩	石斧	小計	総合計	
		口縁部	胴部	円窓			底盤	底盤	底盤	石器	石器	石器	石器					
I区	グリッド取上	46	996	38	2	1082	グリッド取上	4	49	1	7						61	1143
	底点記録(RP)	10	86			978	地点記録(RQ)	2	5	9	1	12				3	32	128
	計	56	1082	38	2	1178	計	2	9	58	2	19				3	93	1271
II区	グリッド取上	48	612	10		670	グリッド取上			42	2						44	714
	底点記録(RP)	16	72	4		92	地点記録(RQ)			1	11	1	16				29	121
	計	64	684	14		762	計	1	53	3	16					73	838	
T1	グリッド取上	28	430	15	2	475	グリッド取上	3	18	2	2						25	500
	底点記録(RP)	21	156	10		187	地点記録(RQ)	1	2	6	1	39				40	227	
	計	49	586	25	2	662	計	1	5	24	3	32				65	727	
T2	グリッド取上	40	489	24	1	554	グリッド取上	2	40	2	7						51	605
	底点記録(RP)	11	87	11		109	地点記録(RQ)	3	8	5	10	1	2			29	138	
	計	51	576	35	1	665	計	5	48	7	17	1	2			80	743	
T3	グリッド取上	20	363	9	1	392	グリッド取上	1	22	2							28	420
	底点記録(RP)	15	49	5	1	70	地点記録(RQ)	2	2	3						7	77	
	計	35	411	14	2	462	計	3	26	8						37	459	
T4	グリッド取上	71	959	14		1044	グリッド取上	1	3	43	3	9	1			60	1164	
	底点記録(RP)	34	189	19	1	244	地点記録(RQ)	6	26	8	13					53	297	
	計	105	1148	33	1	1288	計	1	9	69	11	22	1			113	1401	
総計		360	4487	150	6	5015		4	32	278	26	114	2	5	461	5476		

表注1. 土器類は円盤型土器品のみの出土であった。

2. 打撲石器の剥片裏蓋石器等は、石器・石盤・石削・石器・櫛形石器等。全ての種類が含まれる。

3. 石臼と磨石は共用使用。軸用昌が多いことから未選別で一括カウントしている。

(2) 層位 (図7・8)

トレンチ調査区の層位は地点毎に若干の相違を見るが、第2トレンチk-1区西壁において検出された土層を、現時点におけるトレンチ調査区の模式的な標準層序として活用する。今回の調査で始めて確認された層位は、第3層に最大20~40cmの厚みで堆積している褐色土である。砂、破碎砾まじりの層は無遺物で、昨年度の試掘坑では、この層位で無遺物地点として處理された経緯を持つ。が、今回、この層位を除去したところ、驚くことに、下層に、然然たる造構確認面を含む遺物包含層が厚く堆積している事が判明した。その最下層は地表面下1.6mという予想外の良好な堆積環境であった。この無遺物層の成因は今後の課題であるが、繩文時代造構に、表層を覆う土砂が流下し、遺物包含層を厚くバックした状況は容易に読み取ることができた。ただし、この層が、後期居住域である傾斜面全面に流下してはいないことが、各トレンチの觀察で判明している。東方の第1トレンチと第II調査区では觀察することができなく、第1調査区でも未確認である。よって土砂はトレンチ2を中心幅数十メートルで流下し、包含層をバックしたと見られる。なお、生上面等、造構が検出される面は、4層以下の著しく明度の落ちる粘性の高い遺物包含層の下位、明度・シマリの増す層位という点が共通している。

(3) 土器遺構 (図7・8)

各トレンチで、小規模なビットを始め、土坑、埋設土器(1T)等を検出しているが、代表的な造構を列挙する。第1トレンチにおいては、g-h区で、3層以下に、崩落状態を示す安山岩を多量に含んだ範囲が検出された。トレンチの前後にはこのような状況は看取できなく、明らかに限定的な掘り込み等の人の様相が捉えられた。この多量な落込みを示す地層の下位には、床面直上の状態を示す、柱穴等の造構確認面が現れる。後に、西側に隣接して設置され、多大な成果の上がる第2調査区設営の発端となった地点である。今後の詳細な検討も必要だが、第2調査区で検出された後期堅穴住居跡(ST1)の一部と考察している。加えて、直上のi区では埋設された後期後葉の深鉢形土器が検出されている。関連性が検討課題である。次に第2

トレンチ上部の mn-E 拡張区であるが、先の標準層位として説明した k-1 区東側にある。西壁面で顯著に觀察できるが、全体が緩やかな傾斜を持つ中で、暗色の遺物包含層の下位、生活面直上と考察される層位で急激に落ち込み、フラットに削り出される状況が看取できた。限定された範囲ではあるが、出土する土器は縄文後期中葉が主で、該期の生活面削出に関連する遺構内の可能性を考慮している。第 4 トレンチでは、最も明瞭に、斜面地における水平生活面構成の痕跡を捉えることができた。e-f 区で確認された遺構は、高低差約 1.6m の落差の壁面を持つ。大人の人間の背丈程の高さで斜面上部を切土し、生活面を完全な水平に造成している。小山崎遺跡の斜面地における居住（堅穴遺構）形態の典型を示唆する遺構である。水平な生活面からは、直径 40cm 程度の柱穴（SP 2）が検出され、内部からは 31 枚に上る同一母岩のフレイク集中が検出されている。この範囲からは後期前葉～中葉の土器が検出されている。第 4 トレンチではこの他にも、完全に水平にはならないが、全城で生活面といるべき非常に硬度を伴う土層が、大量の遺物を伴う包含層の下部から検出できる状況であった。

（4）出土遺物（表 1）

① 土器と土製品（図 12～16）

本調査区での土器・土製品の出土総数は 3,075 点を数える。土製品は円盤状土製品のみであり、生産に関わらない遺物の出土はない。

1 T は下部で晚期前葉の大洞 BC 式の浅鉢（52）が出土している。中～上部では後期と中期の資料が半数ずつを占める。43・44、48 は幅の狭い沈線間に縄文が認められる後期前葉の東北北部十腰内 1 式併行。39、46 も口縁部に無文帯や棒状化した橋状突起を持つ後期前葉の土器。49～51 は後期末葉の所謂付土器である。1 は理設状態で出土した深鉢形土器である。タスキ掛け型の入組文の基点と終点が区画線に連結し、6 つの山形突起と同じく 6 の小突起を配する平口縁を有す後期後半の土器であるが、瘤の貼付はない。器外側の中～上部にかけて著しい炭化物の付着が觀察できる。33～41 は中期後葉の隆沈線による精円文等が描寫される大木 9 式～10 式期の土器である。

2 T は上部 mn-E 拡張区が後期中葉を主体とした様相を示し、中期の資料が混入しない特徴がある（95～108）。羽状縄文が多く用され、横走する平行沈線間や隆帯部の刻目が顯著な加曾利 B 式新段階併行である。2 T 中腹より下位では中期後葉と後期が混在し、72、74 の半截竹管の押引による半隆起線施文が使われる前葉中期初頭の資料が上限となる。74 は区画内においても半隆起線の継続を満たす北陸の新保式土器である。76・77 は隆沈線による精円文の大木 9 式土器である。統いて垂下する多条沈線や無文の口縁部を持つ後期前葉の土器（81～83、85・86、88・89）が存在する。後期中葉の土器群は先に述べた mn-E 拡張区に集中し、最後に 90～92 の後期後葉のいわゆる瘤付土器がトレンチ下部より出土している。

3 T 出土土器は後期が主体となり、中期は後葉大木 9・10 式が若干出土するにとどまる。後期は垂下する多条沈線を多用する堀ノ内 1 式併行の土器（116～122）や、渦巻文や幅の狭い沈線間に縄文が施される十腰内 1 式併行期の土器（123～126）が見られる。統く後期中葉の資料は 127～132 にあり、羽状文が盛行し、口縁に刻目を持ち、併行する沈線や蛇行沈線、弧線文の特徴を有する。137 は後期前葉大洞 BC 式である。

4 T 出土の土器は 1288 点に上り、トレンチ調査区では最も多い出土をみた。159 の半截竹管の押引による施文による前葉～中期初頭の土器を上位に、中期後葉～後期前葉までの資料が確認された。160 は押印縄文による施文で、垂下する隆帯の付された波状口縁が外傾する大木 7 式。16～167 は隆沈線による精円文の区画を行う大木 9～10 式の資料である。後期以前の土器はトレンチ下部からの出土が多かった。後期の土器群は各時期とも安定している。170 は地

文が燃糸の波状口縁を呈する後期前葉の鉢である。168～184 は垂下する多条沈線で懸重文、渦巻文等が描かれる堀ノ内 1 式併行期。多重沈線の土器に後続して 186～193 の磨消や充填による幅の狭い沈線間に縄文が施される十腰内 1 式系統の土器が一定量含まれる。194～196 は羽状縄文が盛行し、隆帯部の刻目が顯著な後期中葉の宝ヶ峰式併行期の土器であり、後続する時期は 199 の所謂瘤付土器、197・198 の入組三叉文の晚期初頭がいずれもトレンチの下方区から出土している。

② 石器と石製品（表 2、図 17～19）

出土した片剣を含む石器・石製品は総数 189 点を数える。打製石器の製品（石核含む）は 36 点である。礫石器は 102 点の出土を見たが、石核が 2 点確認されている。小型磨製石斧を含む石斧は 2 点の検出にとどまった。図 17 の実測図には縄文時代に普遍の一通りの打製石器を掲載した。アスファルト付着の資料が目立つのは土地柄であるが、注目すべき石器は 7 である。摘み部を有することから石匙として分類したが、刃部は急斜度の弧状であり、用法的には皮鞣等、搔扒的な使用がなされたと考察したい。しかしこの石器の最大の情報は、摘み部に残された燃糸状に付着した膠着物質である。数条にわたり纖維状物質で巻かれた上、膠着物で固定されたことを示す痕跡が残る珍しい例である。他に 18 は東北地方に特徴的な鏡状石器である。裏面周辺の打面作出がなされ、表面には柄による光沢痕が観察できる。4 の基部の長い有柄石鎌も小山崎遺跡での出土の少ない石鎌形態である。

3 第 I 調査区の調査

（1）調査区の位置（図 2・3）

第 3 トレンチ上部より西に広がりを持つや和平坦な地形に 50m² の面積で設定した。東西のレベル差はほとんどないが、北から南へ緩やかに傾斜する（西壁の南北比高差 1.4m）。第 13 次調査の IV 区北東側に位置する。正面南方約 70m には第 12 次調査で多量の獸骨類を伴う後期前葉の低湿地性の捨場が存在する。

（2）層位（図 9）

層位は東西壁面で比較的の觀察しやすい堆積を示す。西壁では 1～5 層が認められる。3 層からやや粘性を帯び、炭化物を含み出す。4 層は上層に比して明度が落ち、炭化物・遺物共に多く含む粘土質土であるが、堆積が水平である点が注目される。検討が必要なため言及は避けるが、遺物の出土の分布や、地床炉の可能性の遺構の存在から、住居跡の遺構覆土の可能性を指摘しておく。同様に東壁面南部にも黒褐色粘土の水平堆積層が観察される一角がある。なお、pit 等の遺構確認面は 5 層の明度、粘性の高くなる土壤である。

（3）出土遺構（図 9）

明確な堅穴状の遺構を捉えることはできなかったが、多数の柱穴状の遺構に加え、地床炉の可能性のあるもの、溝状の遺構を検出している。多くの遺構は比較的の浅いものであったが、中央の南北ベルトを挟んで東西の両区に、それぞれ大きいくつに集約される関連遺構が検出されている。東区の SP 1 は深さ 60cm、直径約 40cm の大きさである。周辺に確認された pit 群や溝状の遺構が、地床炉と推定している E-L 1 を中心に住居跡等を考察可能か今後の検討課題である。しかし、東壁面で見られる遺物包含層の水平堆積範囲と遺物の出土集中部が一致する状況は興味深い。西区は南西により、遺物の集中が見られる。それに関連して E-L 2 の地床炉比定遺構や、比較的浅い夥り込みの pit が散在する。西壁の觀察による黒褐色で水平堆積を示す遺物包含層も南部で観察でき、遺物出土の集中点と重なる点を合わせ、東区南東隅の

住居跡推定遺構と同様な考察を試みたい。結果、I区には2つの住居跡可能性のある地点が存在するが、後述するII区に比べると、堆積環境が比較的浅く、更なる検討を有する。

(4) 出土遺物 (表1)

①土器と石製品 (図12・15)

本調査区での土器・土製品の出土総数は1,178点を数える。接合資料は図12に掲載した。3は壠ノ内1式併行期、後期前葉の深鉢形土器である。口縁直下の沈線間に縄文が施され、波状口縁を成す。垂下する沈線は4~5本一組となる。内湾する口縁部の直径は約30cmを測る。2は後期中葉の古段階 (加曾利B1式段階) の深鉢形土器であり、3程度の大きな剥片として折り重なり出土しているが、細かなひびが多く、土壤ごと取り上げた後、整理している。施文は撫走する沈線間に区切られた縦の蛇行沈線が特徴で、4つの山形突起により波状口縁をなしている。図15 (138~158) に出土土器を形式別に掲載している。138・139は縄文条痕土器で早期末の素山上層式併行である。140~142は中期後葉・末葉の特徴を示すが、140は狹義の磨消縄文に加え、地文に縦縞文が使われている。後期初頭へ繋がる特徴を有する。143・144は縱方向へ走る多条沈線を使用する壠ノ内1式併行期の土器。158は該期の円盤状土製品である。145・146、148~151は幅の狭い沈線間に縄文が施され、磨消縄文を伴う十腰内1式併行期の資料。147、152~154は羽状縞文が卓越し、磨消縄文の沈線に沿う刺突も見られる十腰内2式、加曾利B2式併行期の土器である。156は粘土粒貼付による後期後葉の瘤付土器である。

②土器と石製品 (表2、図17~19)

出土総量は93点であり、製品と見なされない剥片は58点を数える。35点が石器として認定されている。3点出土した磨削石斧の内1点(33)は庄内地方では産出しない蛇紋岩製の小型の石斧である。他2点(32・35)はいずれも島海山産出の安山岩製定角式の石斧の欠損品である。

4 第II調査区の調査

(1) 調査区の位置 (図2・3)

先行調査した第1トレレン g-h 区での落込み状の遺構検出成果を受けて、堅穴住居跡の存在を想定して西側隣接地に設置された南北8m、東西6m (48m²) の調査区である。南へ傾やかに傾斜する。南東方角の斜面下には丸池の水面を望むことができる。

(2) 層位 (図10)

堆積状況の良さと遺構の集中する地点であることにより、調査区の北壁東部を調査区の模式的な堆積層として採用する。計7層の堆積を確認している。3層から遺物、炭化物を伴うが、4層の黒褐色粘質土中の主体的な遺物の帰属時期は後期であり、シマリのある土層の存在から東寄りの一部分に該期の生活面(床面)の存在を考慮する余地がある。続く5a層は非常に固くしまり、大木9式期の遺物を含む。該期の住居跡覆土である。確認した最下層は7層で、極めて硬質化した中期後葉の住居跡床面である。少なくとも当調査区には後期と中期の包含層が存在し、生活面の切り合いで確認できる。東面壁中~南部では、後期堅穴住居跡可能性遺構(ST1)の堅穴掘り込み状況が3a層以下で確認できる。

(3) 出土遺構 (図10)

調査区内で注目すべき2つの大型遺構が検出された。検出順序により、南側のST1、北側のST2の2つの住居跡である。ST1は後に検出された中期後葉に帰属するST2の両片を切る形で壁面が掘り込まれている。遺構確認面からの深さは約0.3mであるが、床面直上までの検出で掘削を保留しており、完全な地山層の検出はしていないことから、南北ベルト北側の東壁最下層検出面はさらに水平になり、壁面の高さも増す様相を残す。平面規模は南北約4.2m、

東西は東部が未掘の為不明であるが、やや広く約5m程度の東西に長軸を持つ形となる。堆積層序の観察からは、中期後葉の包含層上層から掘り込みが行われていることが観察でき、ST2より後の時代の構築であることは明らかである。覆土内から、少数の後期土器片が検出されている。小規模な柱穴は確認されているが、炉跡は、土層観察用ベルトが遺構中央に十字に残存させたことによる為か、検出できていない。北東部も未掘であり、帰属時期・構造等なお慎重な検討を有する遺構である。ST2は複式炉を備えた庄内平野に面する堅穴住居である。遺構保全を優先して、最小限の掘削に留めし、全面的な床面の検出は行っていない為、主柱穴は確認していないが、規模確認の為のサブトレレンによる周濠・周壁・炉体の堆積層確認を行っている。住居跡の平面規模は東西約5m南北は北側が未掘の為不明である。調査区北壁西部で明瞭な周壁の立上がりを確認しており、遺構確認面からの深さは約0.25mである。複式炉構造は土器埋設部と前部の境に板状の石材が利用されている。埋設土器は炉跡の土器埋設部のEU1に加え、炉跡長軸延長線上の北部床面からEU2が確認されている。なお、骨片等の痕跡の有無を確認する為、埋設土器 EU1内の土壌1/4を採取し分析中である。同様にEL1石匂内・炉周囲の焼土層についても土壤採取を実施している。

(4) 出土遺物 (表1)

①土器 (図13)

本調査区での土器の出土総数は62点を数える。すべて縄文時代に属し、主体は後期中葉～後葉と中期後葉である。58はST1の南西部覆土より出土した。横走する沈線間に蛇行沈線で区切った後期中葉の加曾利B1・十腰内2式併行期の土器である。68は幅の狭い沈線間に縄文が施される十腰内1式併行期、69も口縁部に無文帯が配されることから68同じ後期前葉と目される。70・71はST2のサブトレレン内(床面直上)から検出されたもので、隆線および隆沈線による横円文が施される中期後葉大木9式期の土器である。複式炉の炉底土器は現状保存の為、掘下げ未実施であるが、床面直上検出の土器が大木9式期に比定される為、ST2の所属時期確定根拠としている。第II調査区の包含層からは、中期後葉の55・56・59の大木9~10式併行期資料の他、続く後期の土器も多く検出され、65の後期中葉加曾利B1式併行期の朝顔形に開く深鉢や、63・66の羽状縞文が盛行する加曾利B3式併行期の土器、60・61は入組磨消縞文の発達する後期後葉の土器である。64は下限を示し、入組三叉文が晚期初頭大木9式の特徴を示す。

②石器と石製品 (表2、図17~19)

剥片を含む検出数は73点を数える。打製石器は非常に少なく、石皿・磨石等の礫石器の出土が目立つ。9の縦型石匙欠損品は、裏面の1個縁部に打面を整形した頁岩製の松原技法によるものであり、土器片の検出はなかったが早期に帰属する資料である。第I調査区では素山上層式併行期の縄文条痕土器片が出土しているので同時期の資料と考察できる。

第IV章 成果と課題

昨年の第13次調査では遺跡内に土取りの形跡もあるが、縄文後・晩期などの遺物や遺構を確実に残存していることも把握できた。さらに林道北部の第IV調査区では、意外な高所から土器と遺構類が検出されたことを契機として、N60以北にも試掘坑を設定して山腹斜面の分布調査を行なっている。その結果、東西約100m、南北約50mの範囲内、標高約25mの高さまでその傾斜面に生きた直結する出土品などが検出されて、斜面での明らかな居住を認めることができた。

本年度の第14次調査では、この特異な傾斜面での集落跡解明のためと、かねてから気がかりとなっていた丸池北部の深い谷間の分布を調査している。最初に後者に触れておくと、試掘坑49ヵ所の内42ヵ所から遺物や遺構が発見されて思いがけない成果となった。丸池の北に接する標高6mの林道から標高約30mの北方110mまで、東西最大幅約50mの範囲内の谷間斜面に出土遺物が多く、縄掘りの遺構や土坑・ピットなどが検出されて、傾斜面での生活を明瞭に確認できた。時期は縄文中期中葉である。谷の東に連なる後線越しにある柴燈林遺跡と同時期であるが、丸池を南方の眼下にしていることなどから、丸池遺跡の北部に広がる新知見の範囲としておきたい。

さて、小山崎遺跡14次の本調査は、山腹に探しを入れる4本のトレンチを設けて、その遺存状況により2ヵ所の調査区を設定している。各トレンチは杉を伐採せずに傾斜面に直交させる位置を探し、しかもグリッドの南北線に沿って設けており、トレンチ間の東西距離は任意とはいえない。1T・西部の第I調査区・3T・西部の第II調査区を精査している。各トレンチと両調査区からは多大な成果をえているが、そのなかからいくつかの主要な事項を挙げておこう。

傾斜面に直交させた4本のトレンチは、遺物包含層や遺構の有無はもとより斜面に存在する集落内の層位の確認が主目的であったが、すべてのトレンチに良好な土器や石器の包含状態が認められて、いたるところから木炭片を含んだ斑状の堅固で水平に近い生活面が検出され、土坑やピットも認められている。部分的には身の丈以上の深さにあった。すべてのトレンチ内に縄文人の生活中にかかる情報が潜んでおり、各トレンチは縄文集落の内部に設定されたことが明らかであった。

第I調査区は上層が剥ぎ取られており、遺物の出土も多くはなかったが、地床炉とみられる木炭片の集中部分があり、調査区の全面に大小の土坑やピットなどの遺構もあって、明確な住居跡としてのまとまりの把握は困難であったが、少なくとも2軒以上の住居が存在したようにみられた。後期から晩期初期の時期であろうか。第II調査区の南西部では深い地層から南北4.2m、東西5m以上の横円形に落ち込む後期の遺構(ST1)が出土しており、その北部に埋葬を伴い南北開口の複式炉が検出された。この住居跡(ST2)は直径5mほどで中期後葉の時期と判明した。複式炉の東約2.5mの1T内からは後期後葉(新地式)の埋設した深鉢が発見されている。このII区では中期遺構の東・南部には、それをたち切る状態でより深い層位から後期の遺構が出土したことになる。後期以前の中葉に、この傾斜地に居住を開始していたことが知られた。

いま一つの貴重な知見は、土取りされた範囲が明確となったことであろう。すでにこの山間に上り下りする途中であちこちに大きな段差があることに気づいていたが、今次調査の3Tと2Tの精査によって段差部分が土取りの境界である実態が観察できた。段差の位置には大石が積み重なっており、その上部以北には厚い自然堆積層が遺存しており、その下部以南は7.80cmほどの地層が剥ぎ取られていたのである。この段差ラインは山裾を取り巻くようにめぐっている。地形図では素直に曲線を描くならかな等高線に対して、小さな波状線で出入の大きい等高線があり、このラインから低い区域が土取りを受けた領域といえよう。なお、この土取りの作業は江戸時代の近隣の新田開墾によるものと推定している。

<引用・参考文献>

- 阿部明彦 1999『小山崎遺跡—第2次発掘調査概報』山形県立博物館
 石川・阿部・田中1997『新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究—新発田市中野遺跡の共同資料調査—』北越考古学研究会
 笠井・長澤・寛川・桑原 2006『十日町市埋蔵文化財報告書 第32集 内後遺跡発掘調査報告書』新潟県十日町市教育委員会
 加藤萬太郎 2003『鳥海山と東北の氷河期』
 金子正雄 2007『村越源先生墓誌記念論集 pp.27~44 日本海側における十勝内I式の分布』弘前大学教育学部考古学研究室OB会
 菊池政信・手塚 孝 1999『米沢市埋蔵文化財報告書 第62集 大槻遺跡発掘調査報告書』米沢市教育委員会
 粟澤光男・鎌田 茂 1990『秋田市文化財調査報告書 第199集 大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I—ツカキ遺跡一』秋田県教育委員会
 佐藤慎宏・大川貴弘 2003『八幡町埋蔵文化財調査報告書 第13集 八森遺跡 先史編』山形県八幡町教育委員会
 佐藤慎宏・大川貴弘 2007『佐藤町埋蔵文化財調査報告書 第6集 小山崎遺跡第13次発掘調査報告書』佐藤町教育委員会
 齋藤 守 1994『山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第5集 斎藤遺跡発掘調査報告書』財團法人山形県埋蔵文化財センター
 佐藤慎宏 2005『佐藤町埋蔵文化財調査報告書 第4集 小山崎遺跡第8~11次調査概要報告書』山形県佐藤町教育委員会
 柴橋敬一・今田 正 1972『総合学術調査報告書 島海山・飛鳥 pp.14~34 島海火山の地質と岩石』山形県総合学術調査会
 渋谷孝雄 1988『山形県埋蔵文化財調査報告書 第120集 吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』山形県教育委員会
 渋谷孝雄 1997『山形県埋蔵文化財調査報告書 第199集 分布調査報告書 (2) pp.121~233 II部 小山崎遺跡発掘調査報告書 (1) -遺構、土器、自然科学分析編-』
 渋谷孝雄・竹田純子 2001『山形県埋蔵文化財調査報告書 第91集 小山崎遺跡第4次発掘調査報告書』財團法人山形県埋蔵文化財センター
 鈴木克彦 2001『北日本の縄文後期土器編年研究』雄山閣出版株式会社
 滝沢規則ほか 2002『朝日村文化財報告書 第22集 奥三面ダム周辺遺跡発掘調査報告書 XIV 元屋敷遺跡 II(上段)』新潟県朝日村教育委員会
 戸沢光則 1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
 中野 俊・土谷信之 1992『5万分の1地質図「鳥海山及び吹浦」地質調査所
 新潟県考古学会 1999『新潟県の考古学』高志書院
 福島県立博物館 1983『福島県立博物館調査報告 第17集 三貴地貝塚』福島県立博物館
 水戸部秀樹ほか 2006『山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集 小反遺跡発掘調査報告書』財团法人山形県埋蔵文化財センター
 武藤祐浩・和泉昭一 1991『秋田県文化財調査報告書 第213集 上熊ノ沢遺跡』秋田県教育委員会

表2 掘載石器属性表

排 番 号	番 号	種 類	調査区	出土区	層 位	計測値 [mm,g,(現存値)]				RQ番号	石材	備考
						器長	器幅	器厚	重量			
17	1	石鏃	3T	h		18.7	11.9	3.5	0.8	1	半透明頁岩	有茎
	2	石鏃	1T	e		27.3	13.6	3.4	1.0	4	半透明頁岩	アスファルト痕
	3	石鏃	1T	d		(30.5)	17.4	5.6	(3.1)	12	珪質頁岩	未成(失敗品)
	4	石鏃	4T	l	2	54.4	12.8	3.4	2.3	30	珪質頁岩	有茎
	5	加工剥片	1T	f		35.6	21.5	5.4	5.6		玉髓	石鏃未成品
	6	石匙	4T	a	4	67.1	23.3	8.7	14.7	29	珪質頁岩	縫型
	7	石匙	4T	b	4	46.6	34.2	11.0	22.8	22	半透明頁岩	卷系統の膠着痕
	8	石匙	2T	b		65.0	28.4	3.9	8.8	73	珪質頁岩	縫型
	9	石匙	II	ba		(40.9)	25.3	5.1	(8.5)	16	珪質頁岩	板状技法(早期)
	10	石匙	3T	f		55.2	26.9	9.3	17.6	57	玉髓	縫型
	11	削器	I	ab	4	54.3	17.5	4.4	7.0	33	珪質頁岩	研長削片素材
	12	削器	4T	d	4	(56.0)	41.8	11.0	(34.5)	6	珪質頁岩	研長削片素材
	13	研器	4T	j	5	61.3	34.8	8.1	19.2	49	珪質頁岩	片面加工
	14	磨器	試掘坑	E120N140		(31.1)	33.8	9.9	(10.9)		珪質頁岩	
	15	磨器	I	db		(46.0)	30.8	9.8	(19.4)	10	珪質頁岩	研長削片素材
	16	研器	2T	j	4	65.3	35.7	13.2	32.8		珪質頁岩	研長削片素材
	17	磨器	4T	b	5	(51.3)	46.8	9.5	(30.1)		珪質頁岩	研長削片素材
	18	塊状石器	I	ee	3	66.3	36.8	11.3	31.9	36	珪質頁岩	着柄による光沢痕
	19	石核	1T	e		74.0	50.4	29.6	107.9	2	珪質頁岩	
18	20	磨石	試掘坑	E100N150		88.6	83.0	52.5	641.7		安山岩	磨石兼用
	21	凹石	2T	a		111.8	82.3	62.7	835.7	59	安山岩	両面に敲打痕
	22	磨石	3T	f		97.0	56.3	42.7	388.9	55	安山岩	
	23	磨石	1T	e		(72.5)	61.5	34.7	(278.7)	41	安山岩	
	24	敲石		b	4	88.9	49.6	29.3	154.5	23	安山岩	両面に敲打痕
	25	磨石	3T	h		85.8	66.5	33.2	289.2	53	安山岩	
	26	敲石	4T	a	4	(100.9)	79.0	47.9	(545.1)	28	安山岩	堆部側面に敲打痕
	27	凹石	I	eb		139.3	95.8	52.3	1099.6	31	安山岩	両面に敲打痕
	28	凹石	I	ab		129.1	60.0	49.1	587.4	23	安山岩	
	29	凹石	II	cd		161.1	68.5	49.1	799.1	21	安山岩	
	30	凹石	II	bb		114.7	90.3	54.1	823.1		安山岩	
19	31	石斧	2T	b		(43.7)	(34.0)	11.2	(23.5)	62	安山岩	定角式
	32	石斧	I	ab		(48.6)	(39.1)	(27.2)	(78.1)	27	安山岩	定角式
	33	石斧	I	ad	2	39.0	18.7	8.7	11.6	11	蛇紋岩	小型
	34	石斧	2T	c		(46.4)	(52.6)	(27.1)	(104.0)	68	安山岩	定角式
	35	石斧	I	ab		(35.5)	(33.2)	(24.6)	(41.1)	29	安山岩	定角式
	36	石斧	試掘坑	E110N160		(6.8)	(45.5)	27.3	(159.0)		安山岩	定角式
	37	鍬	試掘坑	E110N160		111.5	69.9	16.9	228.2		安山岩	礫石錐(中期)
	38	鍬	2T	j	5	111.5	81.3	54.0	703.3	76	安山岩	有溝石鍬
	39	石鍬	4T	i	4	43.6	51.7	14.5	45.0		安山岩	アスファルト付着

表注1. 石材の安山岩は西島海火山带のステージⅡ期(9~16万年前)起源の「含かんらん石、角せん石、獲輝石安山岩」が用いられている。

表3 小山崎跡関連（丸池北部山間）の分布調査状況

	E 90	E 100	E 110	E 120	E 130	E 140
N240			無 22°			
N230			2: 0 16°	11°		
N220	無 15°	無 14°	5: 0 12°	28: 0 14°	ST	
N210	無 17°	無 12°	13: 0 16°	SP 47: 3 18°		
N200	2: 0 9°	4: 1 10°	15: 0 14°	SK 26: 3 16°	16: 7 19°	184: 1 7°
N190	4: 0 13°	3: 1 9°	55: 4 17°	ST 18: 0 24°		
N180	3: 0 16°	9: 0 10°	59: 0 25°	GT 125: 2 25°	SK	
N170	1: 0 18°	1: 0 10°	47: 0 19°	SP 11: 0 26°		
N160	1: 0 17°	10: 1 9°	54: 2 17°	26: 2 26°	SK	
N150	2: 0 18°	10: 1 13°	61: 0 18°	212: 5 26°	SK	
N140	無 22°	0: 1 12°	58: 0 18°	SK 108: 3 26°		
N130	2: 0 24°	15: 1 12°	56: 0 13°	21: 1 27°		
N120			186: 10 8°	25: 1 25°		
N110			44: 1 1°	3: 0 9°		

凡例
土器：石器：遺構
傾斜角

1. 調査の試掘坑はGのX : -102900、Y : -81300を原点とし、X軸に東西(E・W)距離、Y軸に南北(S・N)距離で設定した。

2. 土器には土製品、石器には打削・磨削に方に割合を認め、遺構にはビット・土器・甲輪・印輪・鍵・土器等をカウントした。

3. 分布調査ではE100ライン付近を中心的に、東側から西側にかけて実施する。各試掘坑の下段の数値は傾斜角度を示す。

4. 遺物出土数級20点以上と遺構確認の試掘坑は前項を異にする。

表4 試掘坑出土の遺構一覧

試掘坑名	ビット	土坑	床面	他	特記事項	傾斜方向	傾斜角度	標高
E110N140				1	時期不明石組	南西	18°	7.98m
E110N140	1	1	有		SK-1 屢厚最大	南西	26°	13.5m
E110N140				1	SK-2	西	26°	16.0m
E110N140					SP-1	南西	19°	4.68m
E110N140					ST-2	西	20°	6.52m
E110N140					SK-3	西	25°	0.26m
E110N140					ST-1	西	17°	8.05m
E110N140				1	時期不明土坑	南西	14°	3.5m
E110N140		1	有		SK-4	西	7°	8.12m
E110N140			有		SP-2	南西	18°	4.5m
E110N140	1	1	有		ST-3	南西	14°	24.87m

表注1. 試掘坑内にて完結する遺構はビットと認定している。

2. 試掘坑外へ拡大する遺構に関しては土坑と認定した。

3. 土坑の内、水平な床面が認められる遺構は住居跡と判断している。

4. その他の、繩文期以降と考察すべき遺構を表す。

5. 傾斜方向は最大傾斜方向を測定し、標高値は最大値で測定し、50cm内は絶対標高の数値である。

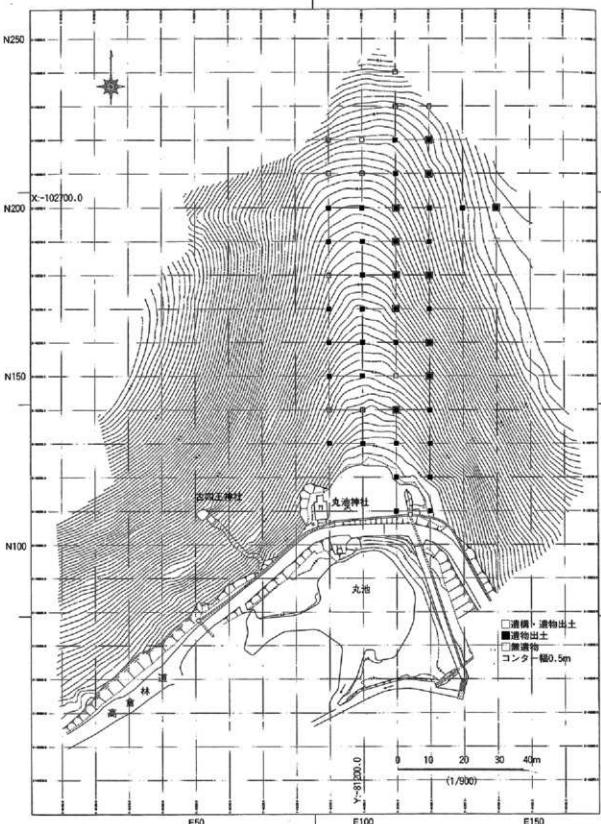


図5 丸池北方試掘坑の配置図

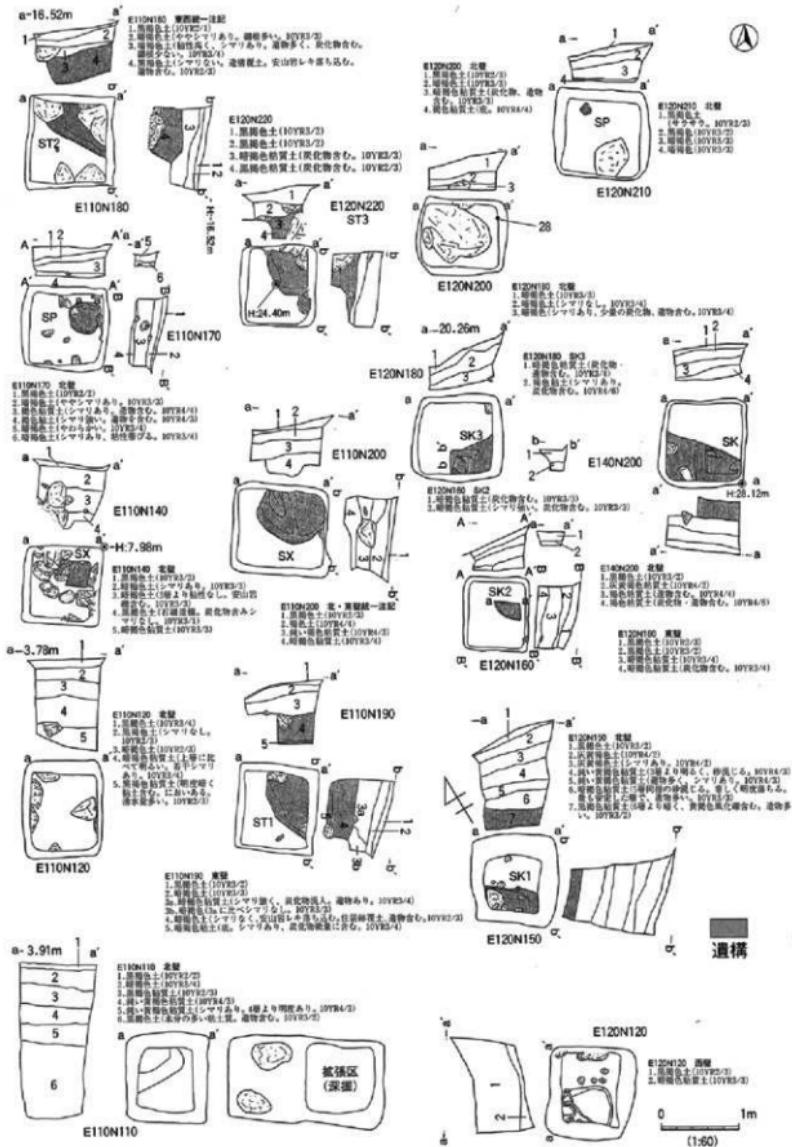
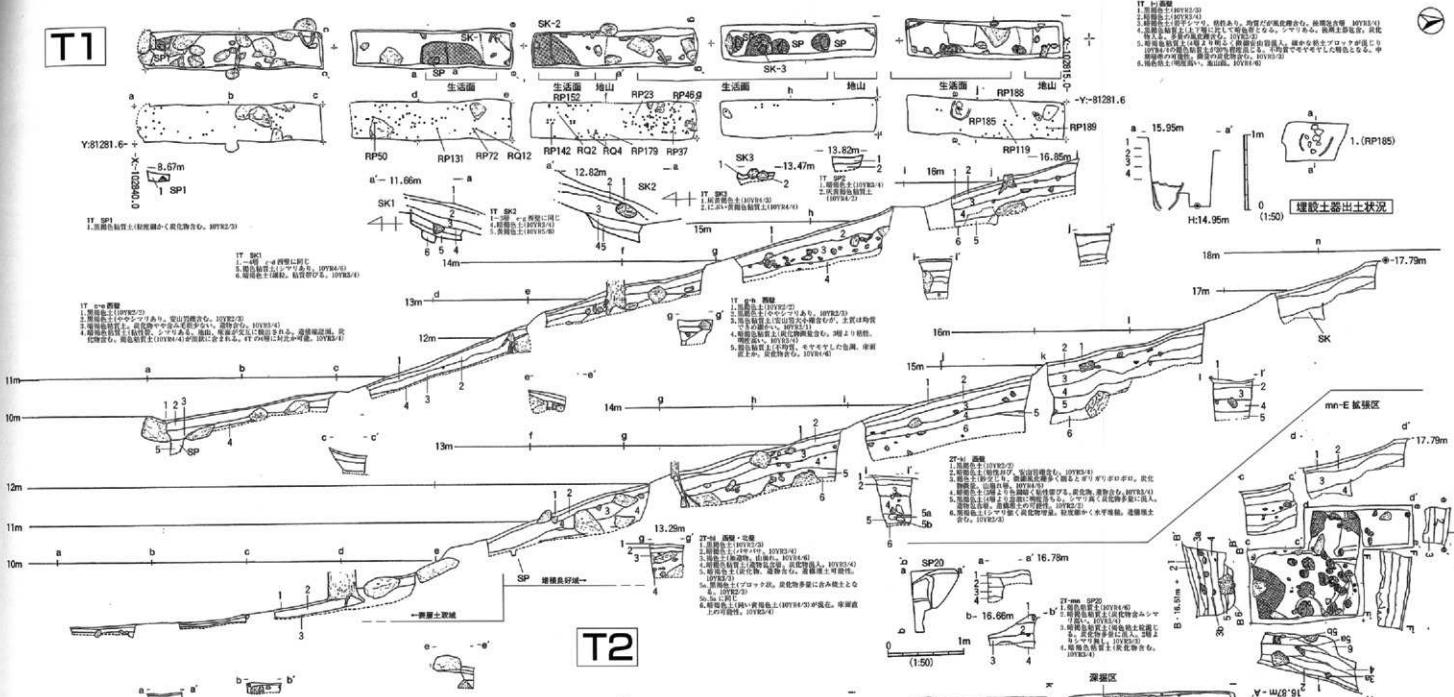


図6 丸池北方試掘坑の検出状況

T1



T2

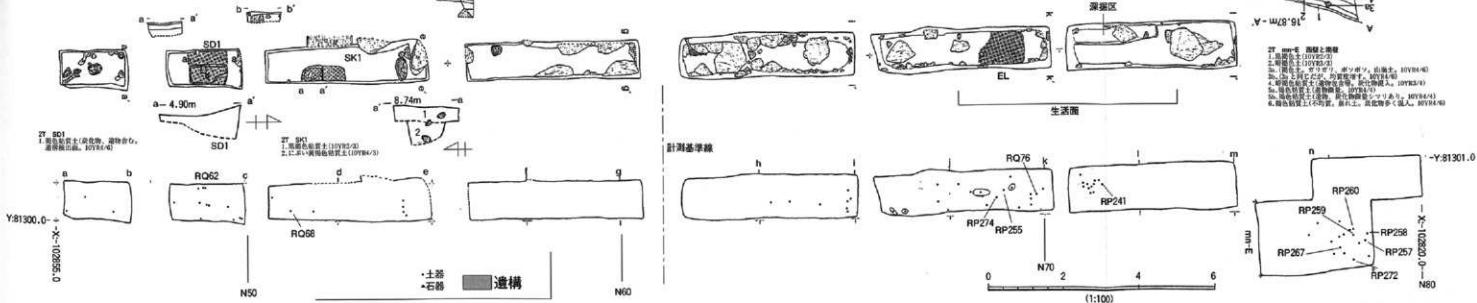


図7 第1・2トレーンチの層序と検出状況

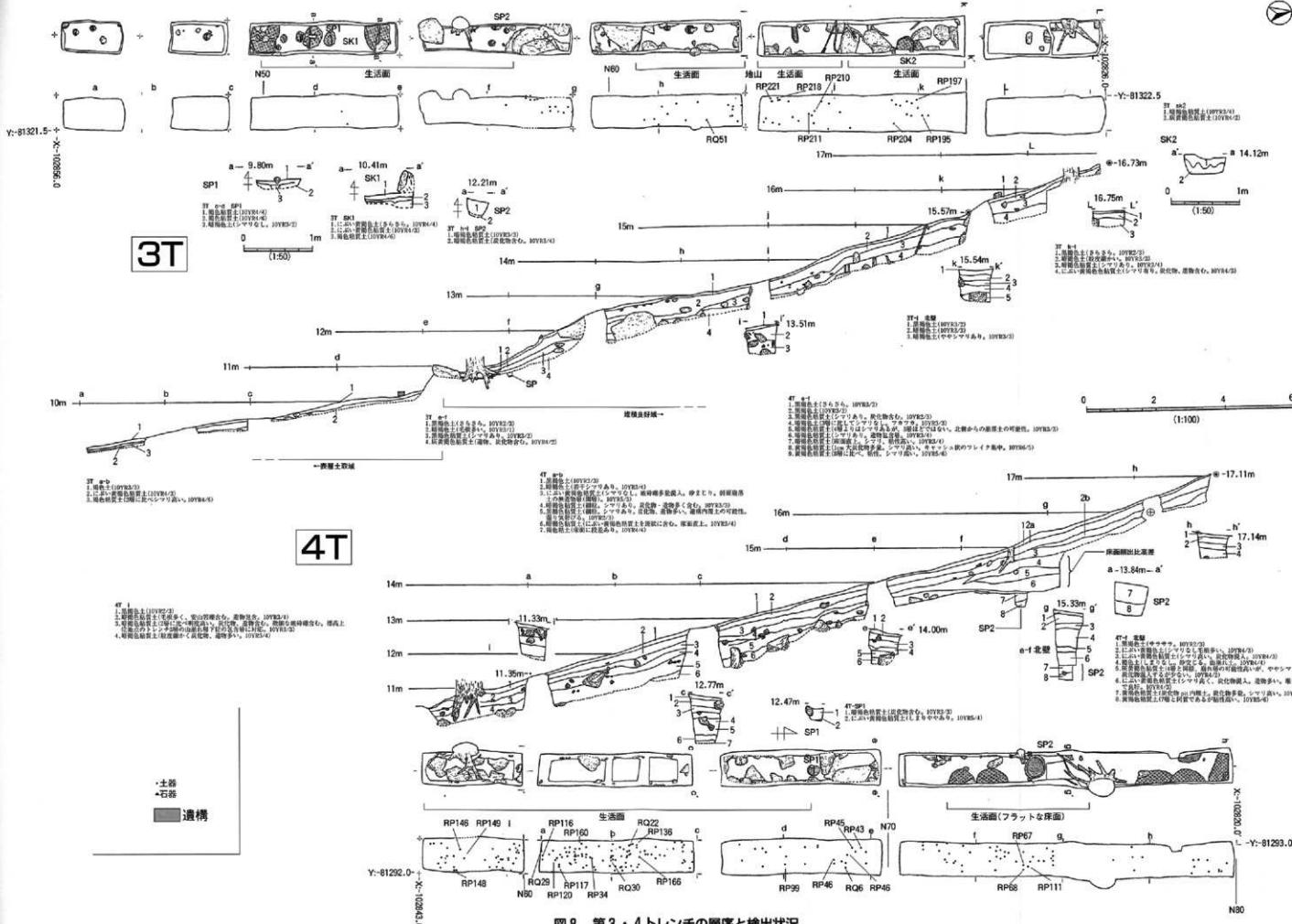


図8 第3・4トレーニチの層序と検出状況

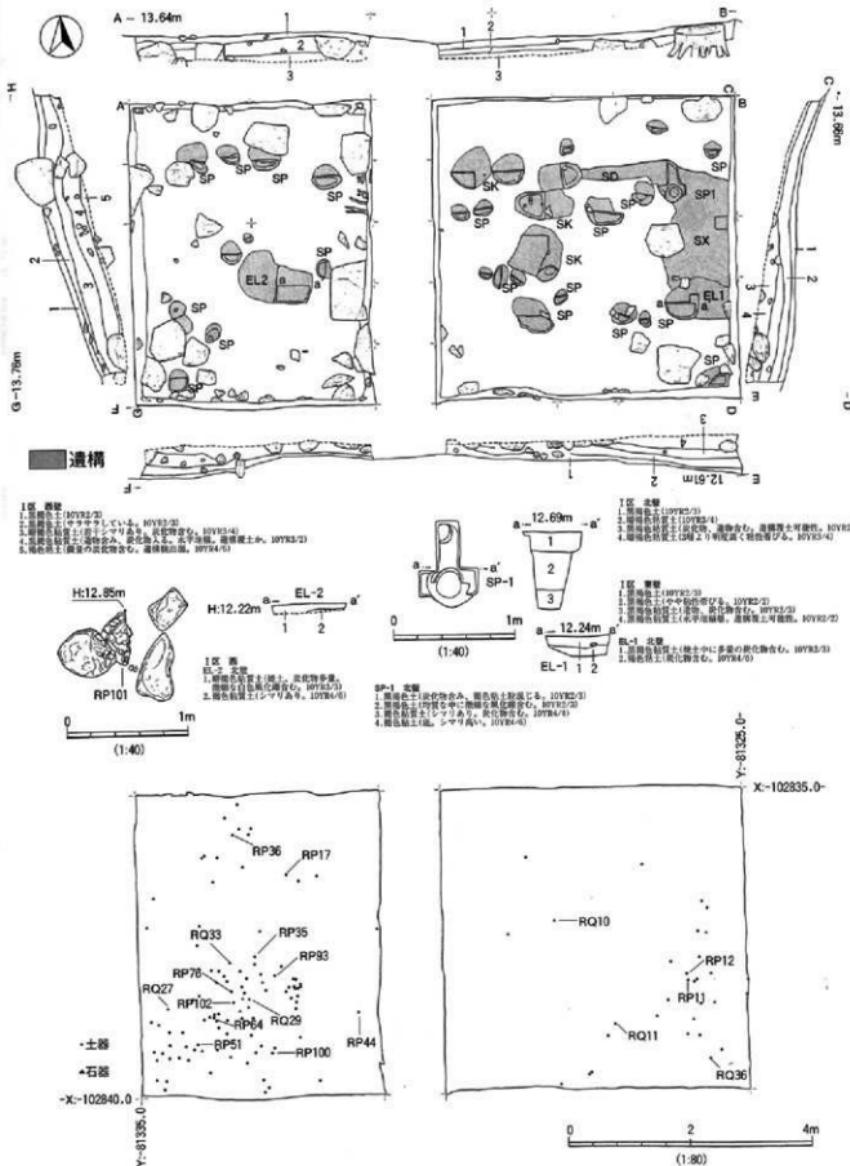


図9 第I調査区の遺構・遺物出土状況

土質：粘土（HYS2/3）上、粗粒土と砂質土を含む。HYS4/2
4. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS3/2
5. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
6. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
7. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
8. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
9. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
10. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
11. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
12. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
13. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
14. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2
15. 土質：粘土と砂質土を含む。粗粒土を含む。HYS4/2

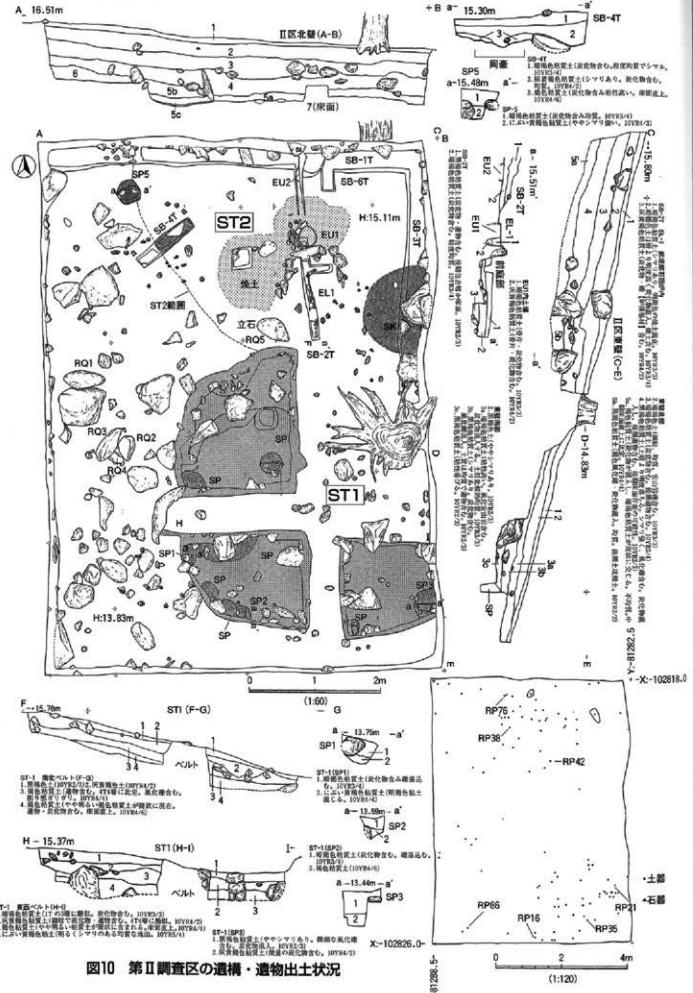


図10 第II調査区の構造・遺物出土状況

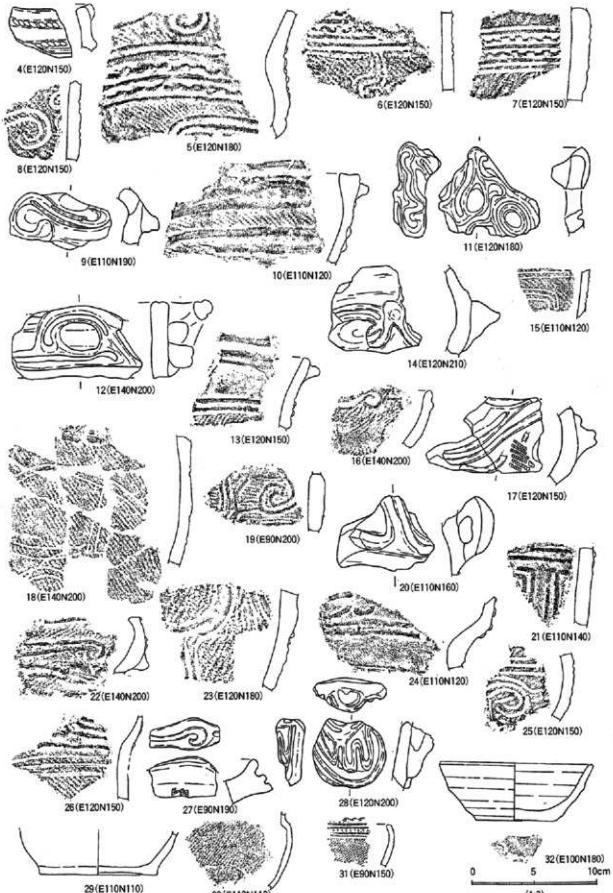


図11 丸池北方試掘坑の出土土器

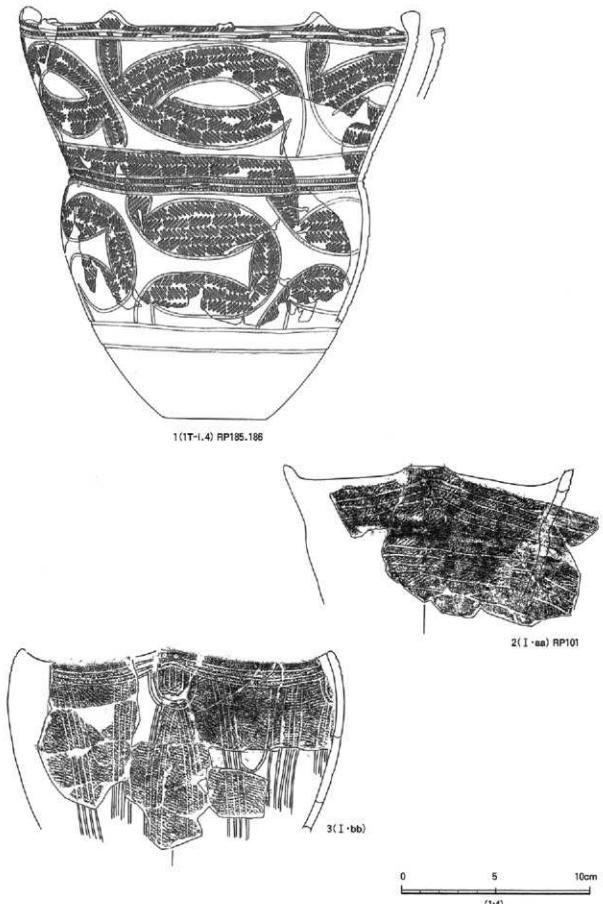


図12 第1トレンチと第I調査区の主要土器

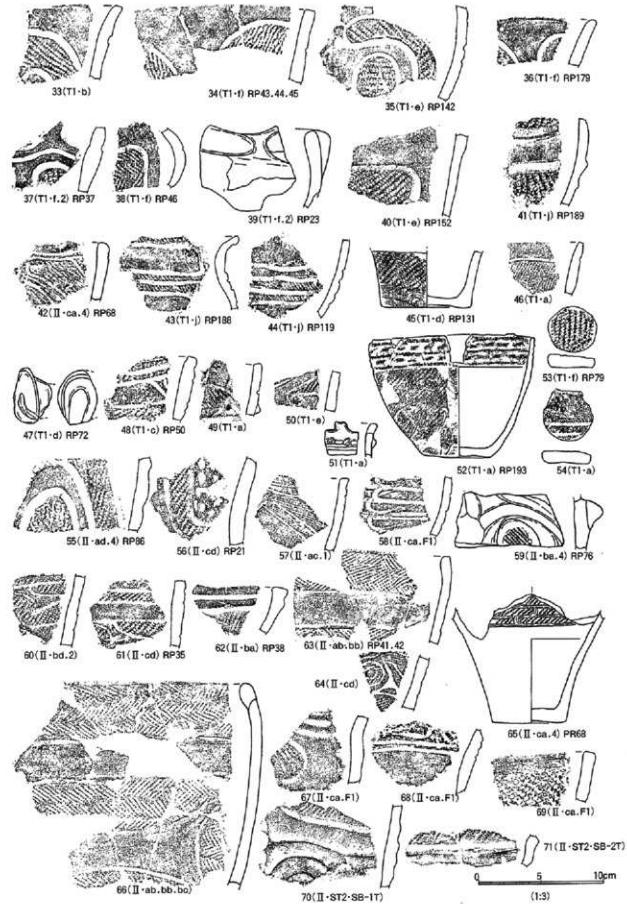


図13 第1トレンチと第II調査区の出土土器と土製品

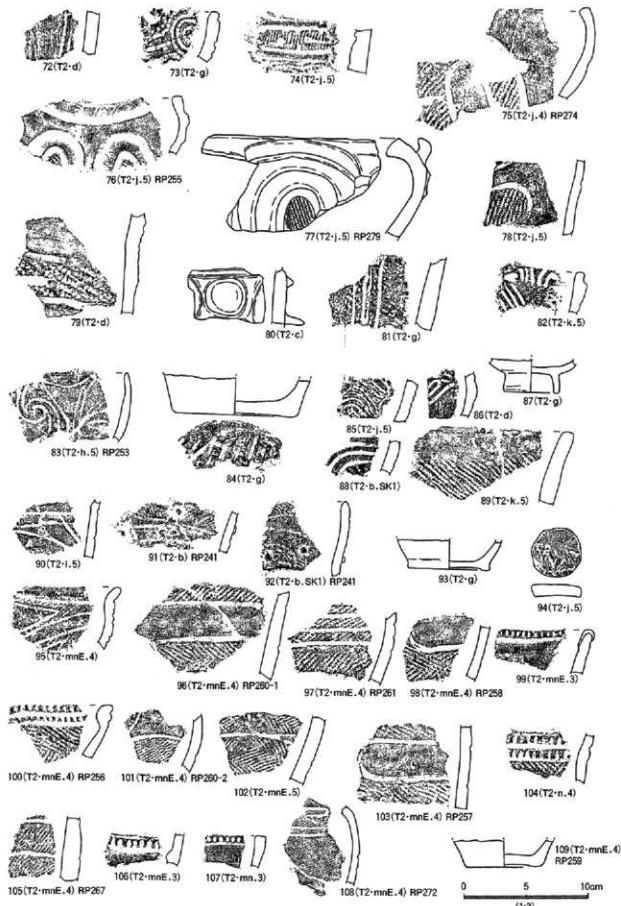


図14 第2トレンチとmn-E拡張区の出土土器と土製品

-30-

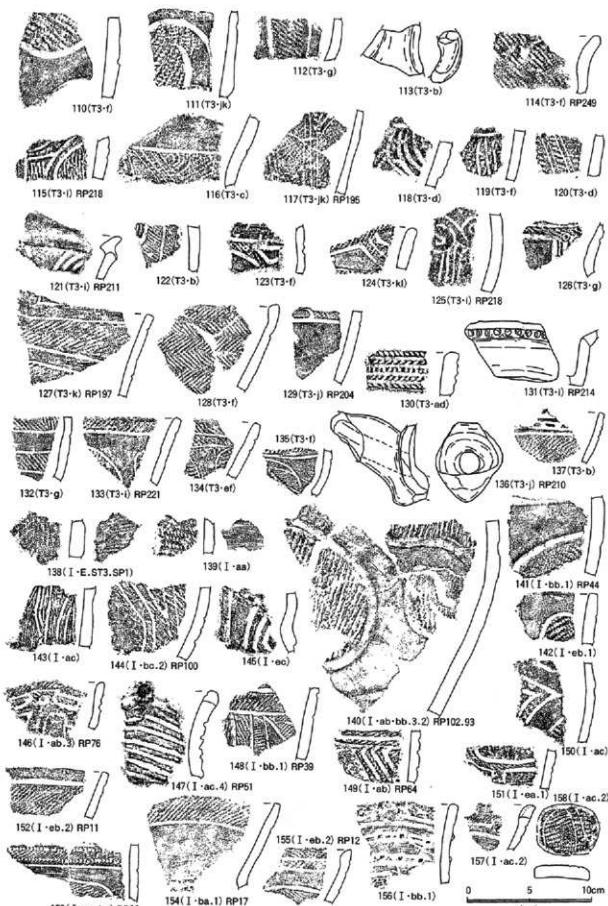


図15 トレンチ3と第I調査区の出土土器と土製品

-31-

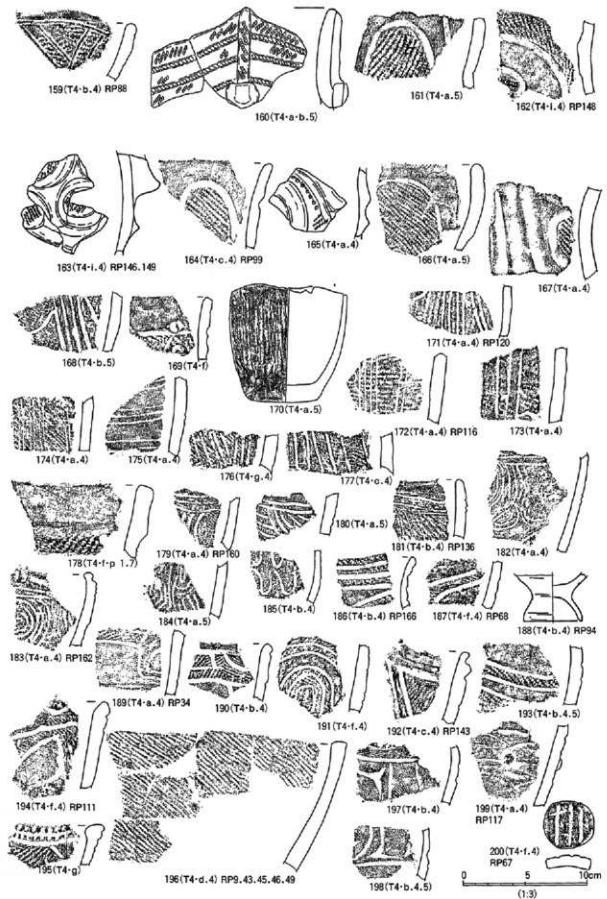


図16 第4トレーニチの出土土器と土製品

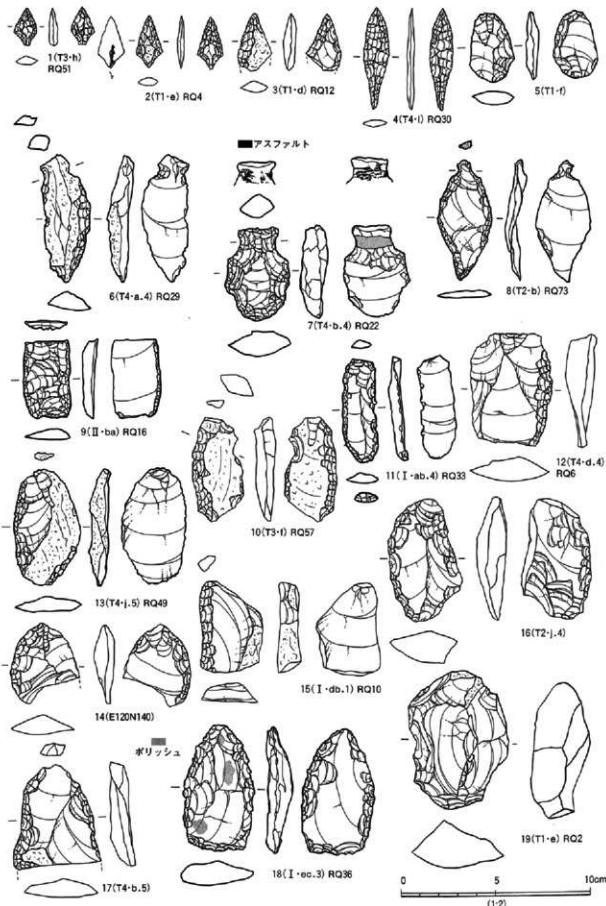


図17 実測図 打製石器

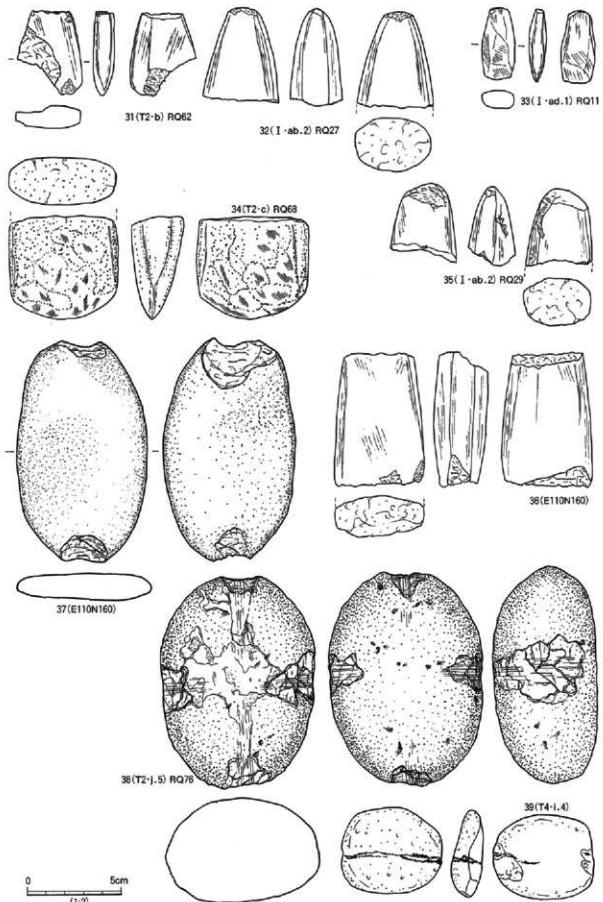


図18 実測図 磨製石器と砾石器

-34-

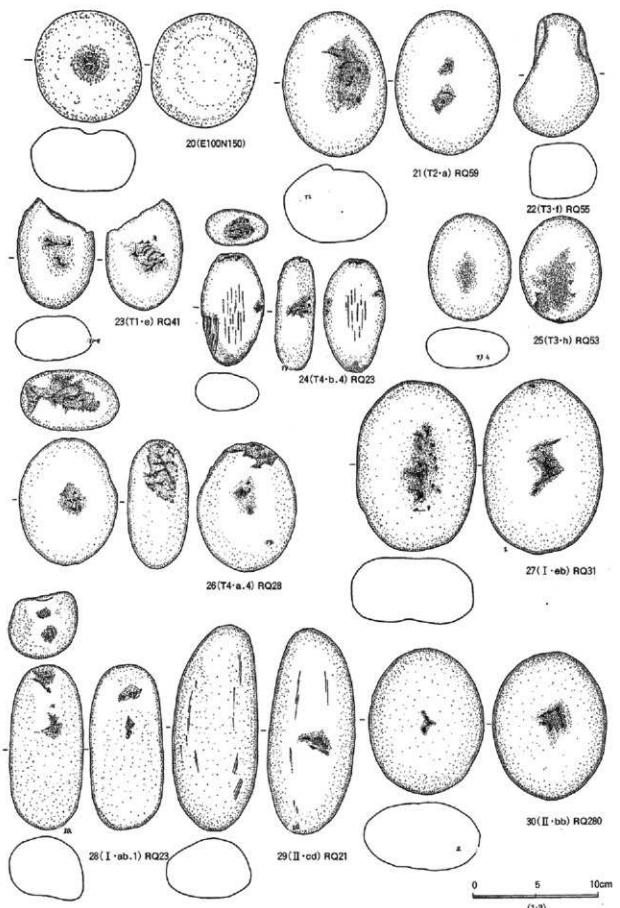


図19 実測図 磨製石器

-35-

写真図版



1 調査区遠景(南西から)



2 E140N200の出土状況(北から)



3 ST1検出状況: E110N190(南西から)



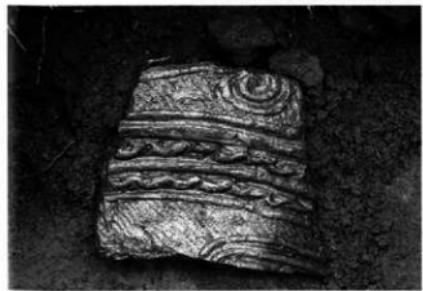
4 ST3検出状況: E120N220(南西から)



5 ST2検出状況: E110N180(南西から)



6 E120N150の層序(南西から)



7 E120N180: 土器5



8 E110N110深堀(西から)

丸池北方試掘坑の調査状況



9 埋設土器[1]検出状況(1T-i 東から)



10 程設土器[1]全体確認状況(南から)



11 第1トレンチ遺構検出状況(g-h区南から)



12 第2トレンチ m-n 北壁埋土 (東から)



13 m-n E 強張区西壁埋土 (西から) ※生活面の水平削出が認められる

第1・2トレンチの調査状況



14 第3トレンチ遺物出土状況(南から)



15 第3トレンチ遺構検出状況(南から)

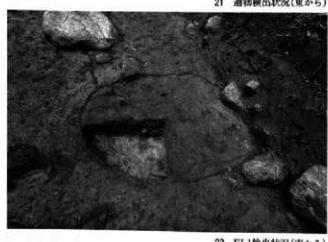
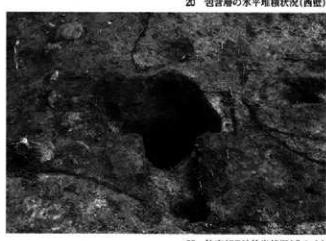
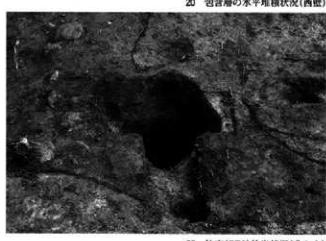


16 第4トレンチ全景(南から)

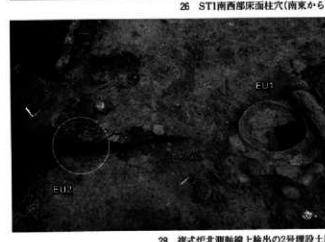
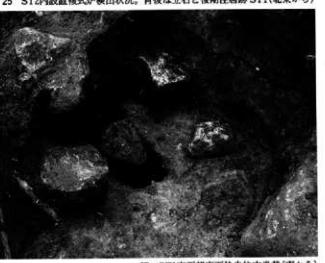


17 第4トレンチ e-f 区検出の切土による水平生活面と土坑(南から)

第3・4トレンチの調査状況



第Ⅰ調査区の調査状況



第Ⅱ調査区の調査状況